

く もん じ まえ い せき
公文所前遺跡

工 場 建 設 に 伴 う

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会

く もん じ まえ い せき

公文所前遺跡

工 場 建 設 に 伴 う

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会

序

高齢化社会や過疎地域の問題は、飯田市にとっても重要な社会問題になっています。その原因のひとつは若者の地元への就職が少なく、県外へ職を求めて出ていってしまうことがあげられています。飯田市では、この解決策のひとつとして企業誘致を進めているところに、伊賀良下殿岡地区へ、東京に本社のある国際自動機械株式会社が工場を建設するという話が持ちあがり、市工業課の仲介でまとまったものです。

今回の発掘調査を実施した伊賀良地区は大扇状地上に発達した地域であり、ほぼ全域にわたって先史からの人々の生活の跡が認められる場所です。この伊賀良地区の東側にある下殿岡地籍は毛賀沢川と新川に挟まれた微高地に位置していますが、水の便が悪いため人の生活には適していないと考えられていましたが今回の調査により、縄文時代中期と平安時代の居住址などの遺構が確認できました。

内容については、報告書に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

近年は考古学ブームで各地での調査報告が様々な形でなされていますが、これらの文化遺産を後世に保存、継承していくことが現在生きている私たちの責務であることはいうまでもありません。そのままの姿で残すことができれば、それに越したことはないと思いますが、地域全体における今日的課題の解決のためには、やむをえない部分もあると思います。社会の発展と文化財保護とうまく調和されている地域になるよう努力することが大切だと思います。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深くご理解をいただいた国際自動機械株式会社の方々と、酷寒の中に発掘作業や細かい整理作業に従事いただいた作業員の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成3年3月

飯田市教育長 福 島 稔

例　　言

1. 本書は国際自動機械株式会社飯田工場建設に伴う埋蔵文化財包蔵地公文所前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は国際自動機械株式会社の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は平成元年12月21日～23日に試掘調査、本調査を平成2年1月6日～2月7日まで実施した。統いて平成2年度末まで整理作業及び報告書の作成作業を行った。
4. 発掘調査及び整理作業においては、遺跡名をKMJとした。
5. 本書の記載については、時代順に記載し、遺構図は本文に併せて挿図とした。遺物及び写真図版は本文末に一括した。
6. 本書は吉川が執筆した。なお、本文については一部小林が加筆・訂正を行った。
7. 本書の編集は、調査員全員で協議により行い、小林が総括した。
8. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序	
例 言	
目 次	
I 経 過	1
1. 発掘に至るまでの経過	1
2. 試掘調査の経過	1
3. 発掘調査の経過	2
4. 整理作業の経過	2
5. 調査組織	6
II 遺跡の環境	6
1. 自然環境	6
2. 歴史環境	6
III 調査結果	9
1. 繩文時代	9
1) 住居址	9
1号住居址	9
2) 土 坑	10
土坑 1 土坑 2 土坑 3 土坑 7	
土坑 14 土坑 16 土坑 27 土坑 31	
2. 平安時代	12
1) 住居址	12
2号住居址 3号住居址 4号住居址	
3. 時期不明遺構	
1) 方形堅穴	16
方形堅穴 1	
2) 堅 穴	16
堅穴 1	
3) 土 坑	17
土坑 4 土坑 5 土坑 6 土坑 8	
土坑 9 土坑 10 土坑 11 土坑 12	
土坑 13 土坑 15 土坑 17 土坑 18	

土坑19	土坑20	土坑21	土坑22
土坑23	土坑24	土坑25	土坑26
土坑28	土坑29	土坑30	土坑32
土坑33	土坑34	土坑35	土坑36
土坑37			
4) 溝			31
溝1	溝2		
4. その他			31
1) 柱穴群			
2) 遺構外出土遺物			
IV まとめ			

挿図目次

挿図1. 調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図2. 調査位置図および周辺地図	5
挿図3. KMJ 遺構分布図	8
挿図4. KMJ 1号住居址	9
挿図5. KMJ 2号住居址	13
挿図6. KMJ 3号住居址	14
挿図7. KMJ 4号住居	15
挿図8. KMJ 方形竪穴1	17
挿図9. KMJ 土坑1・2・3・4・5・6・7・8・9・10 ・11・12・13・18	19
挿図10. KMJ 溝1・2、竪穴1、土坑26	20
挿図11. KMJ K1付近柱穴群	21
挿図12. KMJ 土坑37	22
挿図13. KMJ 土坑35・36	23
挿図14. KMJ W9付近柱穴群	24
挿図15. KMJ 土坑27・31・33・34	25
挿図16. KMJ 土坑22・23・24・25・28・29・30・32	26
挿図17. KMJ 土坑14・15・16・17・19・20・21	27

図 版 目 次

第1図 KMJ 1号住居址出土遺物	37
第2図 KMJ 1号住居址・土坑1・2・3・7・14・27・31出土遺物	38
第3図 KMJ 2号住居址出土遺物	39
第4図 KMJ 3号住居址出土遺物	40
第5図 KMJ 4号住居址出土遺物	41
第6図 KMJ 4号住居址出土遺物	42
第7図 KMJ 土坑9・12・23・24、遺構外出土遺物	43
第8図 KMJ 1号・4号住居址、遺構外出土遺物	44

写 真 図 版 目 次

図版1 調査区全景	47
図版2 1号住居址 同炉址	48
図版3 2号住居址 同カマド 同断面 同遺物出土状態	49
図版4 3号住居址 同カマド 同断面	50
図版5 4号住居址 同カマド断面 同遺物出土状態	51
図版6 方形竪穴1・竪穴1	52
図版7 溝1・溝2	53
図版8 土坑1・2・3・4・土坑5	54
図版9 土坑6・土坑7・土坑8	55
図版10 土坑9・土坑10・土坑11	56
図版11 土坑12、土坑13・14、土坑15・17	57
図版12 1号住居址出土遺物	58
図版13 1号住居址出土遺物	59
図版14 2号住居址出土遺物	60
図版15 2号居住址出土遺物	61
図版16 3号住居址出土遺物	62
図版17 3号住居址出土遺物	63
図版18 4号住居址出土遺物	64
図版19 4号住居址出土遺物	65
図版20 4号住居址出土遺物	66

図版21	4号住居址出土遺物	67
図版22	土坑出土遺物	68
図版23	土坑出土遺物	69
図版24	遺構外出土遺物	70
図版25	遺構外出土遺物	71
図版26	作業風景	72

I 経 過

1. 発掘に至るまでの経過

公文所前遺跡は飯田市下殿岡745-1付近に位置している。

下殿岡地籍を有する伊賀良地区には中央自動車道西宮線飯田インターチェンジがある。このインターチェンジへのアクセス道路をはじめ、市街地を結ぶ都市計画道路、他地域をつなぐ国道・県道の整備が進行中であり、文字通り飯田・下伊那の玄関となっている。

下殿岡地籍は以前、桑園中心の農地であったが、現在は果樹園を中心となっている。しかし、道路整備が進む中、原材料・製品の輸送の便からこの地域は近年工場用地として開発が行われている。とともに、飯田市のほぼ中央という土地柄から住宅地としての開発も進んでいる。

飯田市はここ数年来企業誘致を推進している。それは、都市へ出ていく若者が多い原因の一つとして、地元に就職できる企業・職場が少ない事があげられているためでもある。

このような状況の中、東京都世田谷区に本社を持つ国際自動機械株式会社が飯田工場を建設する計画が飯田市工業課仲介で決定した。

建設計画地は埋蔵文化財包蔵地公文前遺跡として登録されており、近くには公文所前古墳が現存しているため、県文化課の担当職員、国際自動機械株式会社の担当者、建設設計社のおよび市工業課職員、社会教育課担当者で現地において協議した結果、用地範囲を試掘し地下の状況を把握した後再度協議することとした。

2. 試掘調査の経過

平成元年12月21日、協議に基づき試掘調査に着手した。方法は用地内の果樹の間に重機で幅2mのトレンチを2本あけた。

続いて、作業員による遺構の検出を実施した。この時点において、ローム面を切って住居址と思われる遺構とそれに伴う土器・石器が出土した。

3. 発掘調査の結果

再度、関係者による保護に関する協議のなかで、建物部分の発掘調査を実施し、記録保存を実

施することとした。

発掘調査は、平成2年1月6日から始めた。まず、重機により樹木の撤去を行ない、表土剥ぎに入った。

1月11日には作業員による調査にかかった。排土の関係で2回に分けての調査となった。まず、南側（新川寄り）から重機で荒れた土を除去及び遺構の検出に掛かった。この範囲では縄文時代の住居址と土坑及び平安時代の住居址・中世とみられる竖穴を調査した。

1月28日再び重機により盛土を退け、30日から北側の調査にかかった。例年になく雪が多く、その雪を搔きながらの作業となった。この範囲では縄文時代の土坑と平安時代の住居址を調査した。

用地の南端にあたる市道のと境に基準点を、市道と平行に基軸をおき2m方眼のグリッドを設定し、遺構の実測を行なった。2月7日にカマドの断ち割りと測量作業を行ない、現地での作業を終了した。

4. 整理作業の経過

平成2年度になってから、飯田市考古資料館において実施した。出土遺物の洗い・注記・復元につづいて、それらの実測・写真撮影を実施した。量的には多くはなかったが、破片が多く多少手間取った。

遺構図、遺物の実施図のトレースに統いて、原稿執筆、図版組みを行ない、報告書の刊行となつた。

5. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 小林 正春

調査員 吉川 豊 佐々木嘉和 馬場 保之 佐合 英治 功力 司 渋谷恵美子

作業員 大島 利男 木下 傳 木下 当一 板下やすゑ 高橋収二郎 高橋 寛治

松下 真幸 松下 直市 矢沢 博志 吉川 正実 豊橋 宇一 古田八重子

井原 恵子 池田 幸子 大藏 祥子 金井 照子 金子 裕子 唐沢古千代

唐沢さかえ 川上みはる 木下 早苗 木下 玲子 櫻原 勝子 小池千津子

小平不二子 小林 千枝 渋谷千恵子 田中 恵子 筒井千恵子 丹羽 由美

荻原 弘枝 原沢あゆみ 林 勢紀子 橋本 宣子 平栗 陽子 福沢 育子

福沢 幸子 牧内喜久子 牧内とし子 牧内 八代 松本 恵子 三浦 厚子
南井 規子 宮内真理子 森 信子 森藤美智子 吉川 悅子 吉川紀美子
吉沢まつ美 若林志穂子

(2) 事 務 局

飯田市教育委員会

竹村 隆彦 飯田市教育委員会社会教育課長

中井 洋一 飯田市教育委員会社会教育課文化係長

小林 正春 飯田市教育委員会社会教育課文化係

吉川 豊 "

馬場 保野 "

功力 司 "

(平成元年度)

土屋 敏美 "

(平成元年度)

篠田 恵 "

(平成2年度)

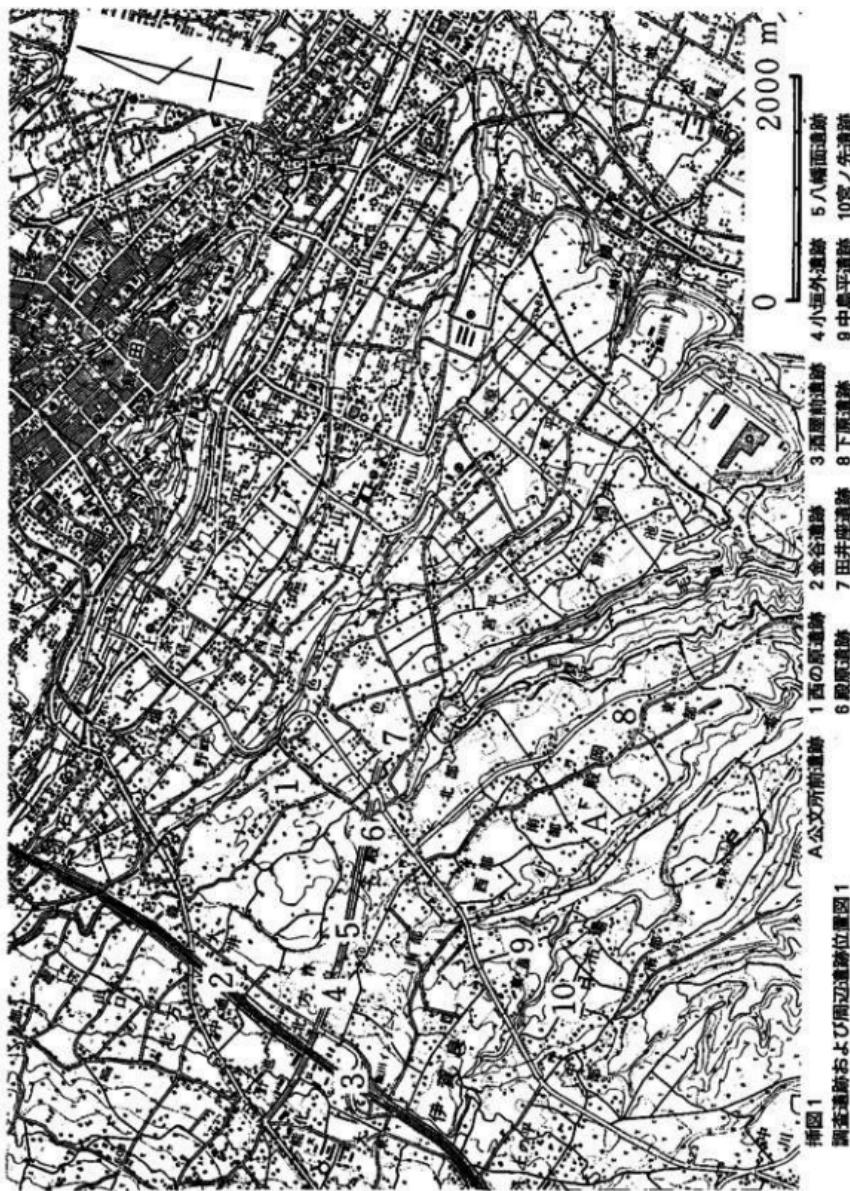
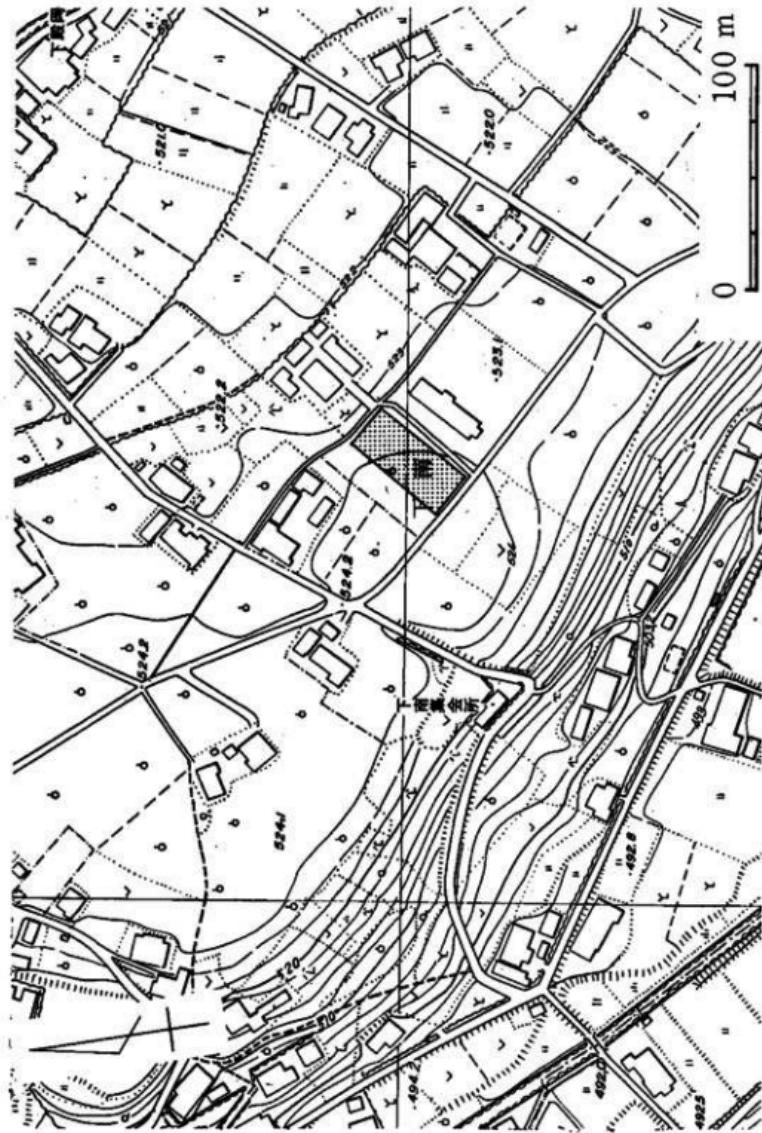


図2 調査位置図および側辺地図



II 遺 跡 の 環 境

1. 自然環境

公文所前遺跡は飯田市下殿岡宮の前に位置する。下殿岡は昭和32年度飯田市合併前は伊賀良村下殿岡であった。伊賀良地区は飯田市街地の南西にあって、木曾山脈の前山の笠松山(1,271m)・高島屋山(1,397m)の東山麓に位置し、北の松川と南の茂都計川の強い押し出しにより広大な扇状地が形成されている。特に松川の扇状地は、下伊那地方の中でも模式的な新規扇状地で、扇端の一部が南の下殿岡まで続き第2段丘に連なっている。伊賀良地区は西方の山麓地帯、松川右岸沿いの段丘面、東の童丘地区に接する段丘面、南の茂都計川流域の段丘面をのぞき、中央部はこの大きな扇状地上にあるといえよう。

この新しい扇状地を西方山麓から流れ出る川は小さく、北から毛賀沢川・南沢川・新川といくつかの支流があり、いずれも浅い谷を形成している。また、松川から引水した大井・新井などの井戸水が扇状地上を東へ流れおり、人為的水利の古くから開けた地域である。

公文所前遺跡は扇状地の端部に近く、標高525m前後の台地の南西側にある。この台地を地形的に見れば、北東側は気賀沢川に切られ河床までの比高差約40m、南西側は新川で切られ河床まで約30mの急斜面の崖になっている。台地上は緩やかな起伏はあるがほぼ平坦といえる。台地を形成している黄色土(ローム層)の上部には黒色土が50cm前後の土層がある。この黒色土中には石がない。

気候的にみれば、台地上であり山地からの風を防ぐものではなく、風あたりが強い。しかし、南向きの斜面にほど近く日当たりはよく温暖である。しかし、水利が悪く大井が造られるまでは畠作(桑園・野菜など)が中心であり、水田耕作が始まるのはその後のことである。

2. 歴史環境

伊賀良地区の遺跡を概観すれば、山地を除いてはほぼ全域に埋蔵文化財包蔵地が認められる。そして、伊賀良東部(北方・上殿岡・下殿岡)で発掘調査をしたものでは、北方西の原遺跡(伴、宮沢1967)、中央自動車道での金谷遺跡・酒屋前遺跡(長野県教委1972)、アクセス道路としての一般国道153号線飯田バイパス小垣遺跡・八幡面遺跡(飯田市教委1988)、殿原遺跡(飯田市教委1987)、気賀沢川をはさんだ飯田市鼎の田井座遺跡(飯田市教委1988)、工事建設に伴う下原遺跡(飯田市教委1989)、構造改善事業で中島平遺跡(飯田市教育委1976)、同じく構造改善宮ノ先遺

跡（飯田市教委1978）がある。これらを時代的にみれば縄文時代から中世までの遺跡である。

縄文時代早期では長野県を代表する立野式土器が出土した立野遺跡はこの地区の遺跡である。縄文時代前期・中期・後期についても、各所で良好な資料を得ている。

弥生時代後期の集落址としては、気賀沢川を挟んで対峙する殿岡遺跡と田井座遺跡の存在が特筆される。

古墳は伊賀良地区全体で、52基を数えるが、現存するものは9基にすぎない。しかも、それらは墳丘がわずかに残っているものが大半である。（長野県史刊行会1981）

奈良時代、古代東山道「育良駅」の所在地とも見られているがその確証は無い。「育良駅」は東山道が長野県内に入って「阿知駅」の次に位置する駅とされている。（市村1961）

平安時代、「伊賀良の庄」の名が現れる。文献によれば中村・久米・川路・殿岡の諸郷が含まれ、松川以南、阿知川以北の竜西一帯と見られており、その中心が伊賀良にあったとする考えがある。

また、この時代臼井川に面した漫蝕谷に土師洞と呼ばれた須恵器の窯跡が存在していた。（遠那1979）

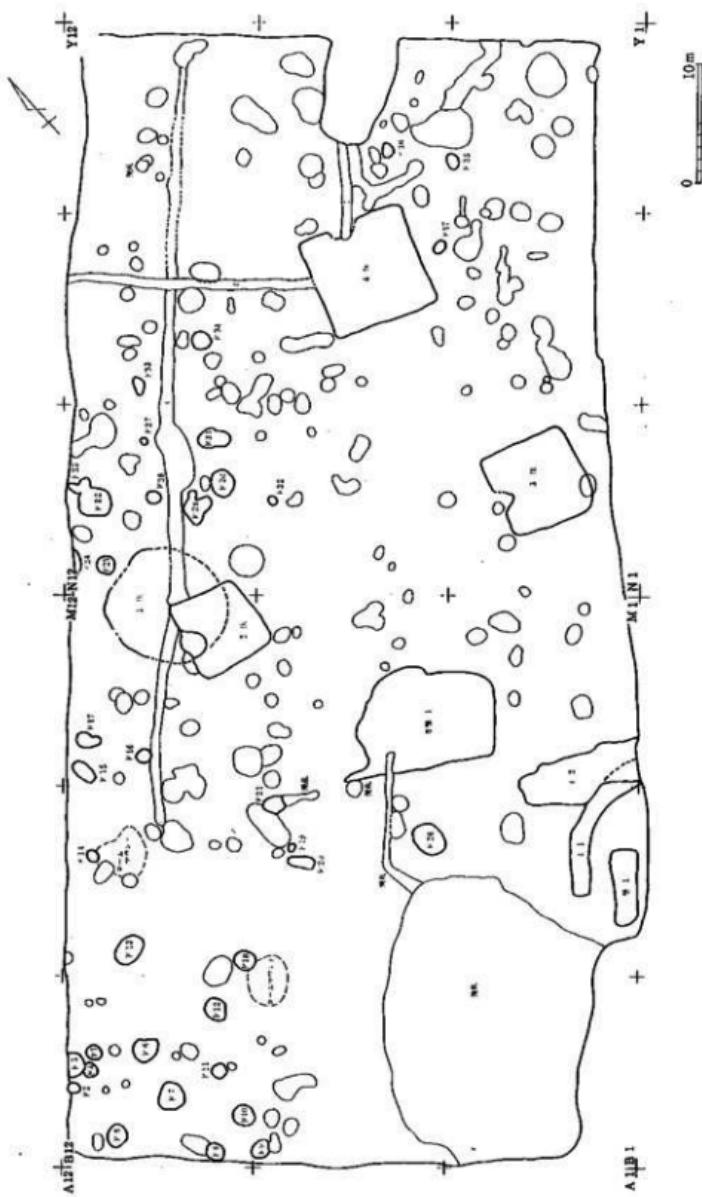
中世においては、鎌倉時代伊賀良庄地頭は北条時政であり、時政以後は北条氏の一族である北条江馬氏が代々それを繼いでいる。江馬氏の地頭代四条金吾頼基は殿岡に居を構えたことが「日連聖人御遺文」に収められているが、ここにでてくる「とのおか」の位置は現在の殿岡かどうかははっきりしていない。（宮下1967）

北条氏滅亡の後、小笠原氏が伊賀良庄地頭となり、その支配の武将を伊賀良の要所においたとされている。そのひとつが三日市場の「下の城」との伝承もある。

戦国動乱期にはいると、小笠原氏は鈴岡・松尾城を築き、その支城が各地にみられ、伊賀良地区では下の城と桜山城跡がある。小笠原氏によって伊賀良地区の開発が進んだ時期と見られている。（筒井1973）

このように伊賀良地区を歴史的に概観すれば、広大で肥沃な扇状地には、原始から現在に至るまでの人々が生活した痕跡がみられる。

插圖 3 KMJ 產煤分布圖



III 調查結果

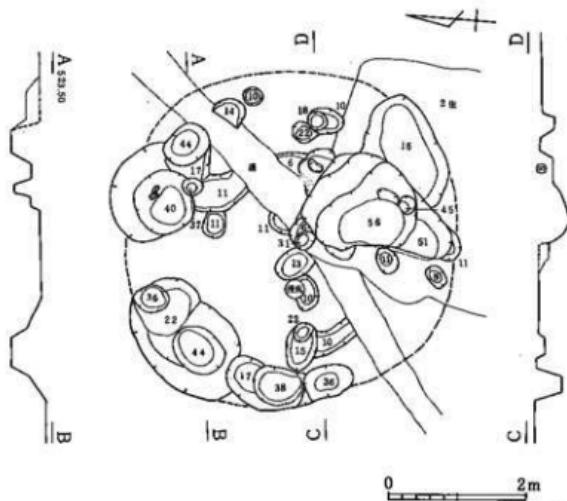
1. 綱文時代

1) 佳居批

1号住居地（播図4・第1・2図）

M11を中心検出した。中央を溝に切られ、南側は2号住居址の貼り床の下で柱穴を確認した。壁はほとんど残っていないため、範囲は確実ではないが、直径5.3mの円形と推定される。また中央やや東よりに石と焼土を確認した。戸の可能性もあるが、溝及び2号住居址により切られほとんど残っていない。戸の位置及び入り口がはっきりしないため、主軸方向は不明である。

床面は柔らかくはっきりしない。壁と推定できる場所には大きな穴が切り合ひながら確認できたが、主柱穴を特定するにはいたらなかった。また、住居址南側には、 $2 \times 1.2\text{m}$ 深さ75cmの不定形の穴がある。これは2号居住址の貼り床の下で確認したものであるが、この住居址に付随するものかどうかは不明である。それ以外にも床面には平面形で50~20cmの円形で深さ15cm程度の穴



插図4 KMJ 1号住居址

がある。しかし、これらも上部からの擾乱の跡の可能性があり、直接この住居址に付随するかどうか不明である。

覆土は暗褐色であるが若干炭が含まれていた。遺物としては、土器片（第1図1～17）はあるが、器形のわかるものはなかった。

石器としては、磨製石斧（第1図18）打製石斧（第1図19）が1点ずつ。他に硬砂岩製の横刃形石器（第1図20～26、第2図1～3）があり、それは壁際の穴から出土している。その他にも敲打器（第2図4・5）と石錐（第2図6・7）があった。

出土した土器から縄文時代中期の遺構と見られる。

2) 土 坑

土坑1（挿図9・第2図）

南側の試掘トレンチは調査グリッドでいえばD及びE区をほぼ北西に通っている。その北西端付近で土坑をまとめて検出した。その中でもやや東よりD12のはば中央で検出し、完掘した直径0.6mの円形を呈しているものがこれである。深さは28cmで、底は平坦である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

覆土から竹管文を施した土器片（第2図8）が出土している。

土坑2（挿図9・第2図）

土坑1の西側、調査区段C12の壁際で検出した。北西側が一部調査区外にかかり完掘はできなかったが、ほぼ全体を調査した。直径0.5mの円形で、深さ27cmを測る。底は平坦で壁は比較的急角度に掘り込んである。

覆土からは平行沈線文を施した土器片（第2図9）及び輝緑片岩の打製石斧（第2図10）が出土している。縄文時代の遺構とみられるが詳細時期は不明である。

土坑3（挿図9・第2図）

土坑2の北東隣D12で検出したが、北西側は用地外に広がるものと見られる。調査した部分は1.0×0.7mの半円形である。深さは26cmで底はほぼ平坦、壁は比較的急角度に掘り込まれている。

覆土からは、沈線文を施した土器片（第2図11）、隆帶文をもつ土器片（第2図12）、及び、横刃形石器と見られる綠泥岩が出土した。縄文時代中期の遺構とみられる。

土坑7（挿図9・第2図）

土坑3の南東側C10で検出した、直径1.2m円形の土坑である。深さは48cmと比較的深い。ほぼ平坦な底の中央には径20cm深さ12cmの穴がある。壁は急角度に掘り込まれており、南側の壁に

は腰がある。形態からみれば落し穴の可能性が強い。

覆土からは、石斧と見られる緑泥岩及び平行沈線文を施した土器片（第2図13）が出土している。縄文時代の遺構と見られるが、詳細時期は不明である。

土坑14（挿図17・第2図）

土坑12の北側H12のほぼ中央で検出した。南東でロームマウンドを切っている。規模は0.5×0.4mの梢円形とごく小さい。ほぼ平坦な底までの深さは24cmを測る。壁は比較的急角度に掘り込んである。

覆土からは、隆帯と半裁竹管による条線を組み合わせた横様をもつ土器片（第2図14）が出土している他、打製石斧の刃部とみられる硬砂岩も出土した。縄文時代中期の遺構とみられる。

土坑16（挿図17）

土坑14の東側でJ11で検出し、完掘した。直径0.6mの円形で深さは33cmを測る。底はほぼ平坦で壁は比較的緩やかに掘り込んである。

覆土からは隆帯文をもつ土器片と硬砂岩製の打製石斧の基部が出土しているが、図化しなかった。縄文時代の遺構とみられるが、詳細時期は不明である。

土坑27（挿図15・第2図）

1号住居址の北東、Q11で検出し、完掘した。直径0.3mの円形で深さ11cmと小規模であり、土坑というよりも柱穴かもしれない。

覆土からは平行沈線文を施した土器の小破片（第2図15）が出土した。縄文時代中期の遺構と見られる。

土坑31（挿図15・第2図）

土坑27の南東側Q9で検出し、完掘した。1.4×0.8mの不整梢円形であるが、中央がくびれており、やや歪んだ瓢箪形に見える。深さは17cmで、底はごくわずかに南に傾斜している。壁は南側が緩やかに立ち上がる以外は比較的急角度である。

覆土から小破片であるが平行条線を施した土器（第2図16）が出土した。縄文時代の遺構と見られるが詳細時期は不明である。

2. 平安時代

1) 住居址

2号住居址（挿図5・第3図）

M9を中心、北側で1号住居址を切って検出した。3.4×3.3mと比較的小さな正方形である。主軸はN77°Wを示している。

カマドは西壁の中央に位置している。石芯粘土カマドであり、完全ではないが袖石は残っていた。

床面には貼り床が施されており、東側中央の壁近くでは、特に良好に残存しており、入り口と考えられる。しかし、周溝は確認できなかった。

柱穴は4個確認した。P1はカマドの南西隣で壁にかかって検出した円形のもので大きさは20cm深さ18cm、P2は南東角の30cm深さ22cmの円形のもの、P3は北東角の不整円形のもので深さは18cm、P4は1号住居址の柱穴を切っていたため、しっかりとプランの確認ができず、掘り過ぎてしまったが、深さ14cmであった。

その他には東側の壁近くにある梢円形のものは、入り口施設に関係するものと考えられる。

壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土からは土師器の壺（第3図2）、土師質で形態は壺と見られるが底部を持たないため、用途が不明なものが（第3図1、3）が出土している。その他は須恵器の壺（第3図7～10）を中心である。蓋は破片であるが、土師器（第3図4）と須恵器（第3図6）の両方が出土している。また、底部のみで器形がわからないが、葉状痕の残る須恵器（第3図5）がある。石器は、火を受けて割れたと見られる砥石（第3図11）が出土している。

平安時代の遺構である。

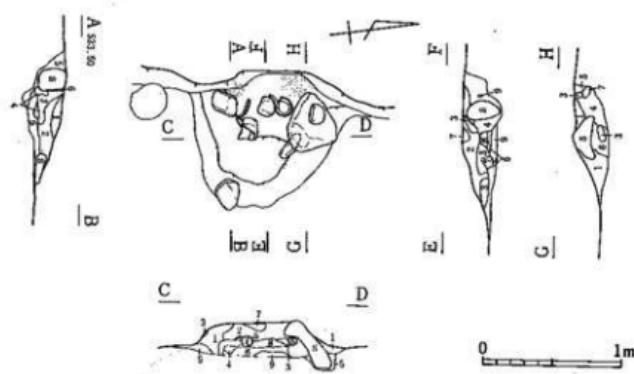
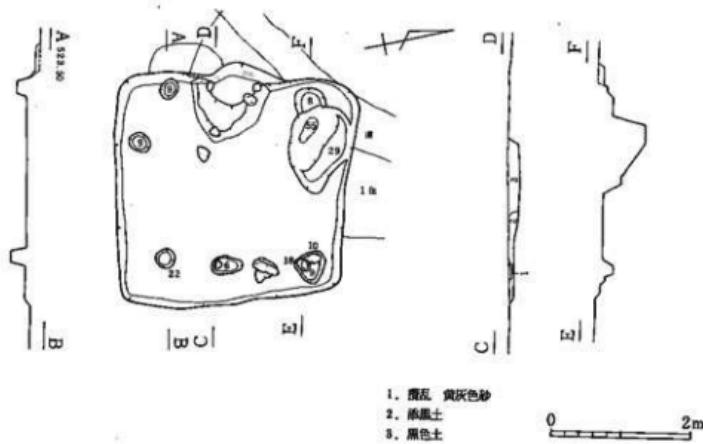
3号住居址（挿図6・第4図）

P2を中心検出し、完掘した。3.8×3.6mの隅丸方形で主軸方向はN78°Wカマドは西壁のほぼ中央にある。石芯粘土のカマドであり、北側の袖石は完全に残っていた。

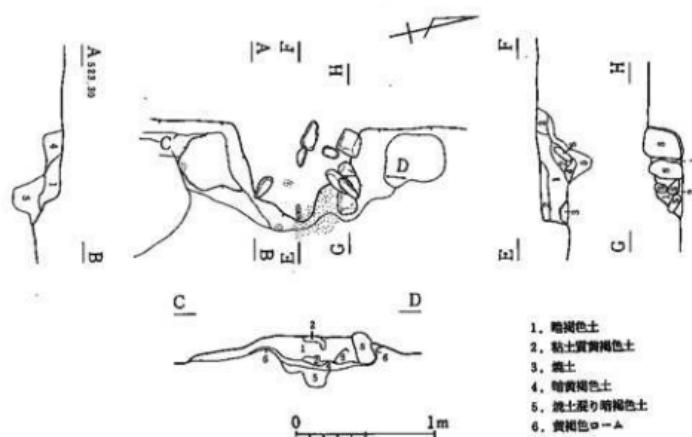
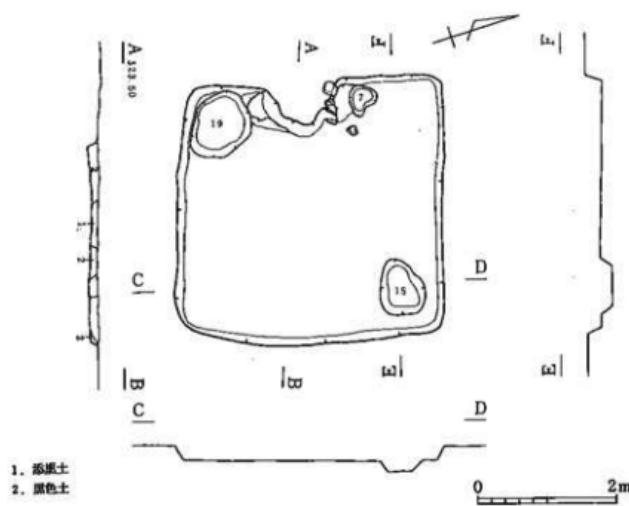
さらに北壁中央にも焼土を伴う箇所があり、壁の外へ60×50cmの範囲で掘り込みがあり、石及び遺物が出土したためカマドとした。西側のカマドは以前に使用されており、作り替えの可能性がある。

床は中央部に良好な貼り床が残っていた周溝は確認できなかった。床面では焼土及び炭の混じった黒色土を覆土とする3つの穴を確認したが、主柱穴は特定できなかった。

床までの深さは24～18cmとさほど深くないが、壁は比較的急角度に立ち上がっている。



插図5 K M J 2号住居址

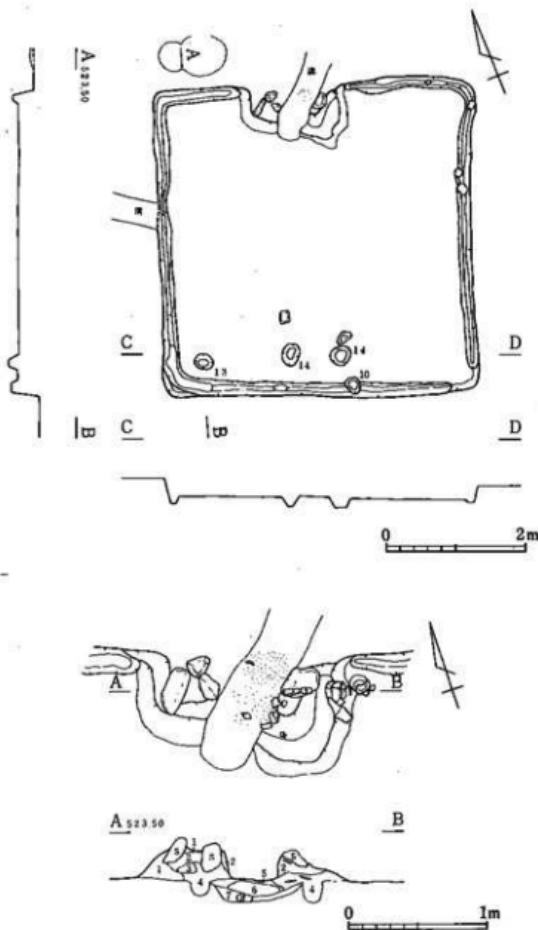


插図 6 KMJ 3号住居址

覆土からはカキメが
はっきりとみえる長胴
の壺（第4図1・2）
の他は須恵器の壺（第
4図3～6）・蓋の破
片等が出土している。
石器としては砂岩の砥
石（第4図7）がある。
平安時代の遺構であ
る。

4号住居址（挿図7・ 第5・6・8図）

試掘時に北側のトレ
ンチで検出したもので
あり、3号住居址の北
側T6を中心検出し、
完掘できた。4.6×4.5
mのほぼ正方形で主軸
はN17°Eを示してい
る。北壁と西壁は0.4
m幅の溝により切られ
ている。この溝は住居
址の覆土上で直角に曲
がっているのが確認で
きた。カマドは北壁の
ほぼ中央で確認できた。
石芯粘土カマドであり
袖石は残っていたが、
前述の溝によりその中
央部は破壊されていた。
床面には貼り床が施
しており、中央がごく
わずか窪んでいるがおおむ



1. 粘土色土
2. 暗黄褐色土
3. 緑色粘土
4. 粘土混り暗黄褐色土
5. 粘土混り暗黄褐色土
6. 砂土
7. 黒色土混り黄色土
8. 黒色土（擦亂）

挿図7 KMJ 4号住居址

ね平坦で、検出面からの深さは34mある。壁はほぼ直角に立ち上がっており、壁直下には幅約10cm、深さ8cmの周溝が全面に認められた。

床面で確認できた柱穴は3個のみでいずれも住居址の南側に位置し、大きさも0.3m深さも12cmと揃っていた。それ以外に穴ではなく主柱穴は特定できなかった。

覆土から出土した遺物には、表面にカキメが残る長胴の甕（第5図1）、小型の甕（第5図2）。また、表面にタタキ跡のある須恵器の甕の口縁部（第5図4）、同じく須恵器の小型甕（第5図3）さらに須恵器の蓋（第5図5・6）、环（第5図7・8、第6図1・2）もある。その他には灰釉陶器の皿（第6図3）、同じく碗（第6図4）と遺物量は比較的多い。

石器としては花崗岩製の台石（第6図7）砥石（第6図5・6）の2点ありいずれもかなり使用されている。また、鉄製品（第8図12）も出土しているが、用途は不明である。

平安時代の遺構である。

3. 時期不明遺構

1) 方形堅穴

方形堅穴1（挿図8）

K 5を中心にして検出した。規模はおおむね5.0×3.4mの不整精円形である。東からに南から西にかけて9cm前後の段が続いている。その部分まで含めれば5.8×4.5mの長方形となる。堅穴の底は東から西へわずかに傾斜している。深さは最も深い西端で40cmある。底の北側と南東側にはかなりな量の焼土がある。火を使用した跡と考えられるが、それは炉やカマドといった施設を伴っていない。また、北西側の壁ぎわで0.9×0.6mで、深さ26cmの穴と1.5×0.7m深さ7cmの精円形の穴が切り合っているため、本来の壁は破壊されているものと見られる。その上部も14cm程度の落ち込みにより切られている。壁の立ち上がりは、中段に腰をもつ東側が緩やかな以外は、比較的急角度であり、特に南の角はほぼ垂直である。

この堅穴の南側にある平坦な部分を中段とすれば前述した掘り込みと検出面との比高差は9cmにすぎず、浅い掘り込みであり、堅穴にむかってやや傾斜している。この段の際に柱穴が3個確認できた。南西に位置する穴は直径30cmで深さ22cmと比較的大きく、南の角にあるものは、直径20cmで深さ19cm、南東に位置する穴は直径20cmであるが深さ50cmある。これらに対応する柱穴が確認できないため、この施設は形態は不明であるが、一般の住居址とは異なったものであろう。

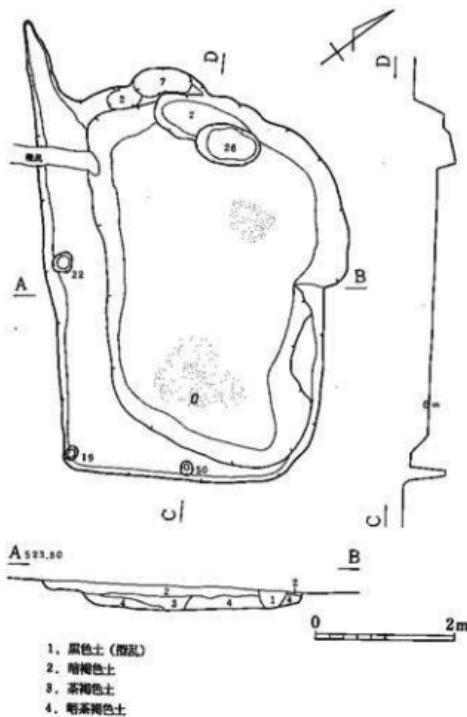
覆土からは須恵器の环・蓋・甕の破片、繩文式土器とみられる小破片及び土師質陶器の破片が出土している。しかし、いずれも時期決定の材料にはならなかったが、形態から推察すれば中世の遺構とも考えられる。

2) 穴

堅穴 1 (挿図10)

調査範囲の南端にはかなり大きな落ち込みがある。この落ち込みの範囲は用地外に広がるため、把握できなかつた。土地の所有者である矢沢博氏の話によれば「何代か前の家主が蔵を建てる時に赤土をとった」との事であった。この落ち込みの東隣のG 1・H 1にかかるて3.2×1.1mの長方形の堅穴を検出し、完掘した。深さは36mで底はごくわずかに東から西に傾斜している。南東から南西にかけての壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、それに対して反対側はやや緩やかである。

覆土からの遺物の出土はないため、時期・性格とも不明である。



挿図8 KMJ 方形堅穴 1

3) 土坑

土坑 4 (挿図9)

C12で土坑 3 の南側の壁に接して検出し、完掘した。直径0.5m、深さ26cmで底はほぼ平坦である。壁は西側がオーバーハングしているのを除けばほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土中からは土器の小破片が出土しているが、時期決定まではいたらなかった。

土坑 5 (挿図9)

調査区西端B11で検出し、完掘した0.9×0.8mの円形に近い梢円形を呈している。深さが26cm

ある低部はほぼ平坦であるが、西壁直下には深さ6cmの穴がある。壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土からは硬砂岩のかけらが出土したのみで時代の特定はできなかった。

土坑6（挿図9）

D11で検出したが、試掘レンチに北東側の壁を切られているため、規模は推定で $1.2 \times 1.0\text{m}$ の楕円形である。底は北から南に向かって傾斜しており、北側の壁下では深さ12cmであるが、南側壁下では23cmになる。また底の中央やや南よりには5cm程度の段が認められる。壁は比較的急角度に立ち上がる南側を除けば緩やかである。

覆土中からの遺物の出土はなかったため、時期および性格は不明である。

土坑8（挿図9）

調査区南側道路より、B9で検出した。北側では別の穴を切っている。大きさは $0.7 \times 0.6\text{m}$ の隅丸方形で、平坦な底までの深さが36cmある。壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土中からは土器の破片とともに近世以後のものとみられる陶磁器片が出土している。新しい土坑とみられるが時期の特定はできない。

土坑9（挿図9・第7図）

土坑8の南東側、B8の壁際で検出した。東側では別の穴と切り合っているが新旧関係は不明である。規模は直径約0.8mの不整円形であり、深さは33cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土から打製石斧（第7図1）が出土しているが時代の特定には至らなかった。

土坑10（挿図9）

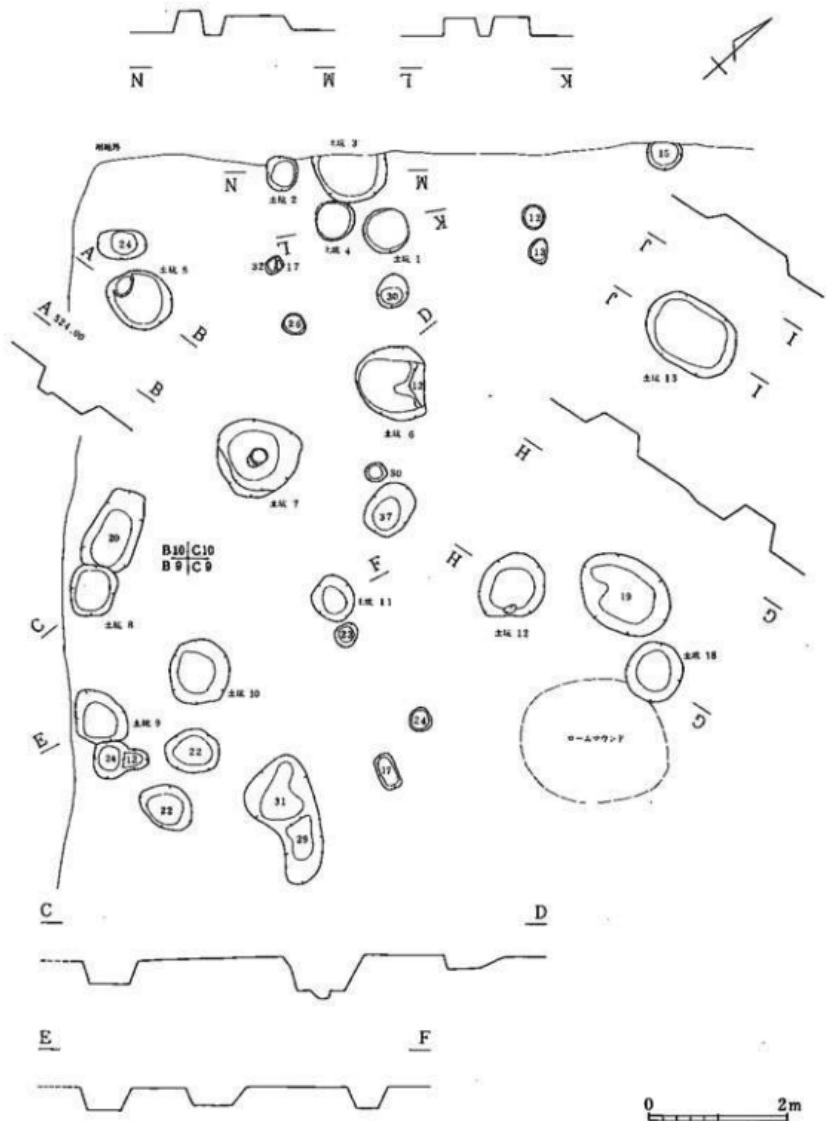
土坑9の北側で、C9にかかるて検出し、完掘した。大きさは $1.0 \times 0.8\text{m}$ ではあるがほぼ円形で、深さは26cmある。底はほぼ平坦で、壁は南側が緩やかに立ち上がるのに対し、北側は比較的急角度である。

覆土からは土器片が出土したが、時代の特定はできなかった。

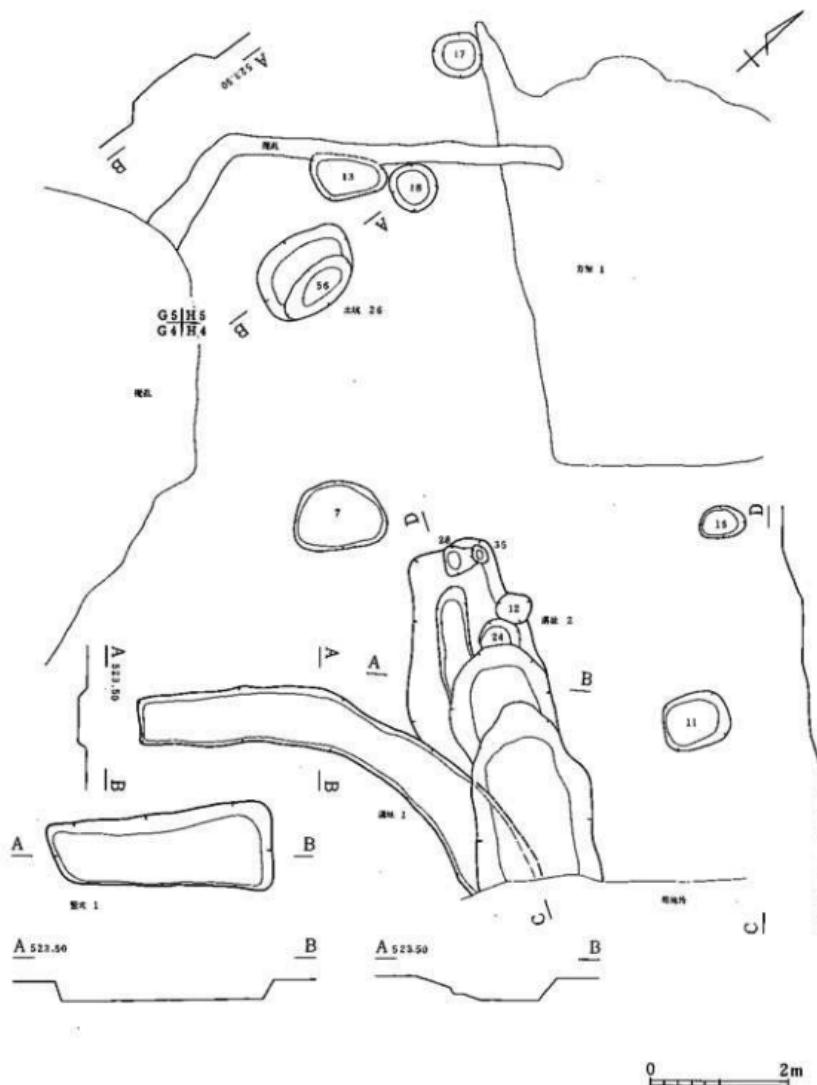
土坑11（挿図9）

土坑10の北側、D9で検出した。直径0.7mの円形で、深さは31cmと比較的深い。壁は急角度に立ち上がっている。

覆土からは土器片が出土しているが、時期決定にはいたらなかった。



插図9 KMJ 土坑1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・18

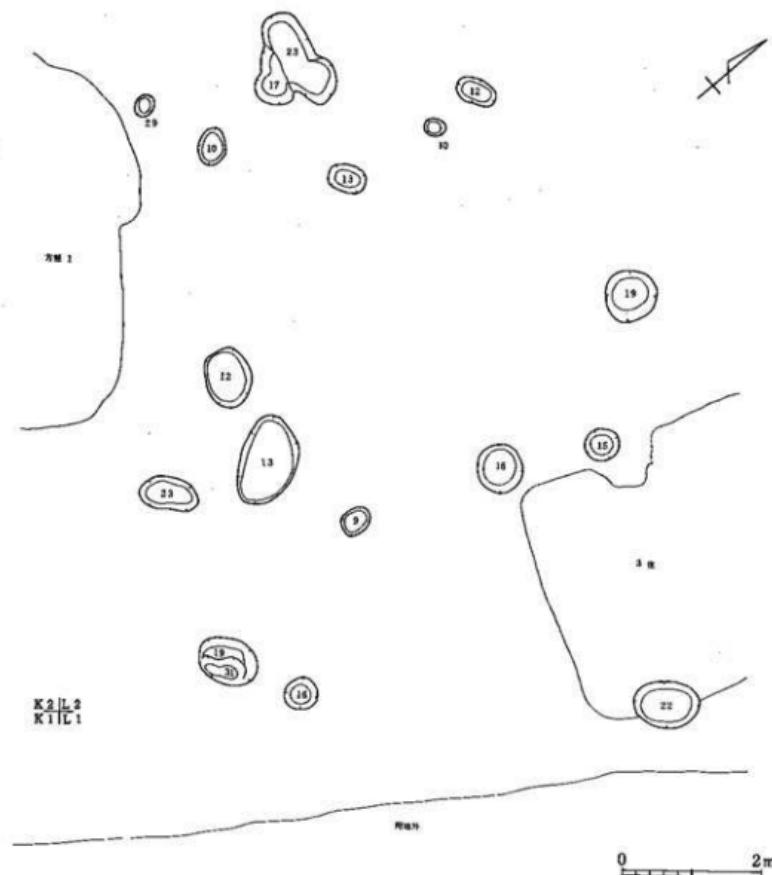


挿図10 KMJ 溝1・2、竪穴1、土坑26

土坑12（挿図9・第7図）

土坑8の東側で試掘トレンチ内のE 9で検出し、完掘した。直径0.9mのほぼ円形で、深さは27cmある。底はほぼ平坦であり、壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土からは土器片（第7図2）と打製石斧（第7図3）が出土しているが、時期決定にはいたらなかった。



挿図11 KM J K 1付近柱穴群

土坑13（擲図9）

F11で検出し、完掘した。規模は 1.4×1.0 mの精円形で深さは20cm、底はごくわずか西から東へ傾斜している。壁は比較的急角度に立ち上がっている。

獨特中からの遺物の出土はないため、時期・性格とともに不明である。

土坑15（挿図17）

土坑14の北側、J12のはば中央で検出し、完掘した。 1.1×0.8 mの楕円形である。深さは14cmで底はほぼ平坦、壁は西側がほぼ垂直に立ち上がっている以外は比較的緩やかである。

覆土中からの遺物としては、土器の小破片や打製石斧の基部とみられる硬砂岩、拳大の花崗岩などが出土したが、時期の特定にはいたらなかった。

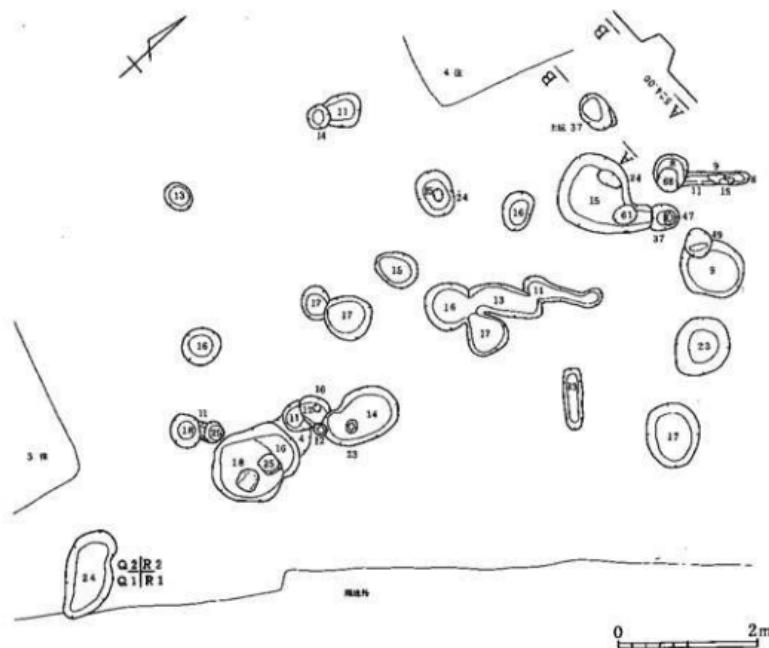


插图12 KMJ 土坑37

土坑17（挿図17）

土坑15の北東側の隣で検出した $1.0 \times 0.6\text{m}$ のものである。中央がくびれており、平面はやや歪んだ瓢箪形である。深さは13cmで底はごくわずか東側に傾斜している。壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土からは土器の小破片が出土したのみで、時期の特定はできなかった。

土坑18（挿図9）

土坑12の東側、F 9
で検出し、完掘した。

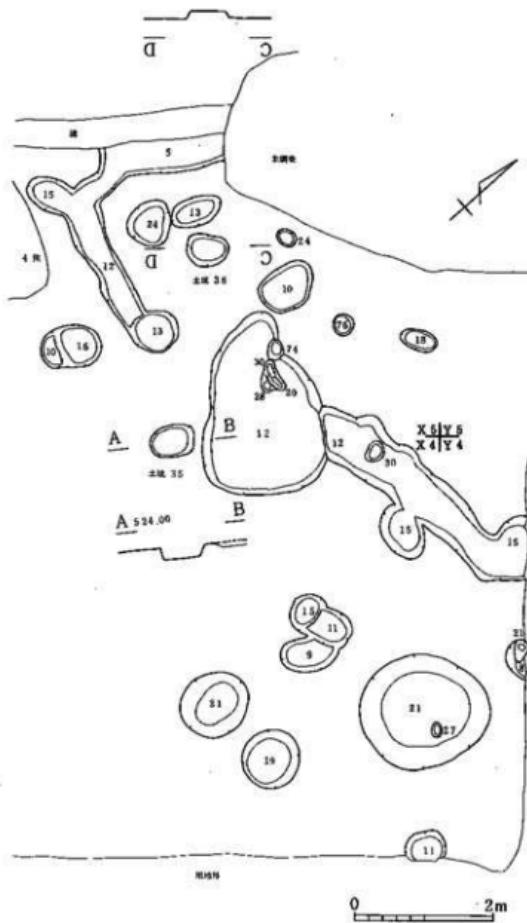
南側ではロームマウン
ドを切っており、大き
さは直径0.8mの円形
を呈している。深さは
35cmとやや深く、底は
ほぼ平坦である。壁は
比較的急角度に立ち上
がっている。

覆土からは土器の小
破片が出土しているい
が、時期決定にはいた
らなかった。

土坑19（挿図17）

H 8で検出した、直
径0.3m深さ15cmのご
く小さな円形のもので
ある。壁はやや緩やか
な立ち上がりをしてい
る。

覆土からは土器の小
破片が出土しているが、
時期決定にはいたらな
かった。

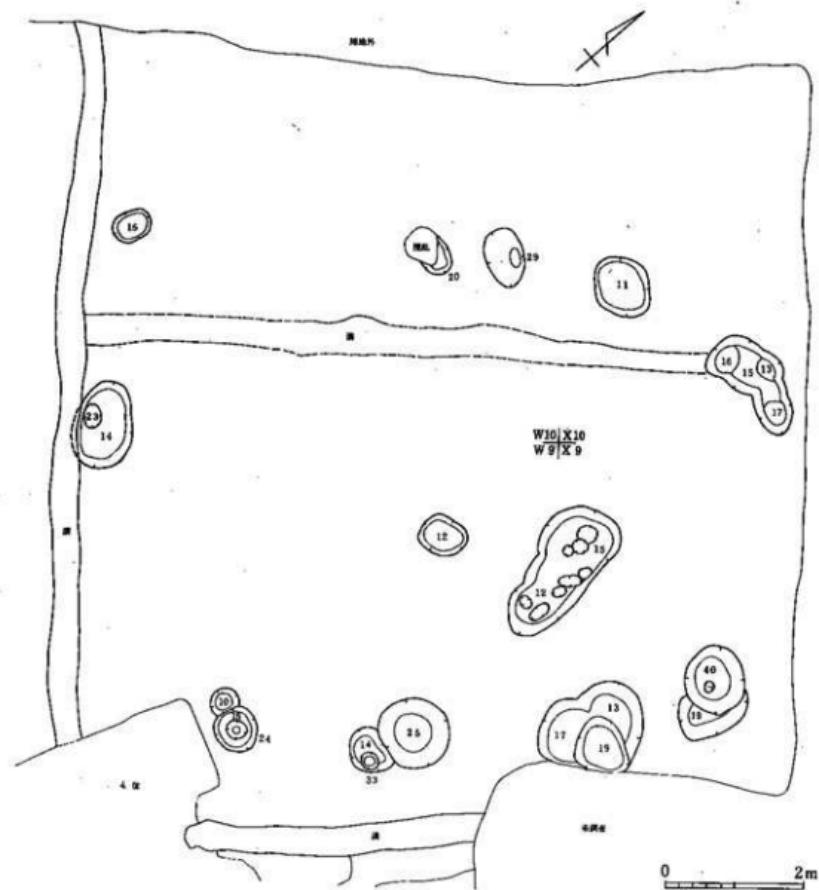


挿図13 KMJ 土坑35・36

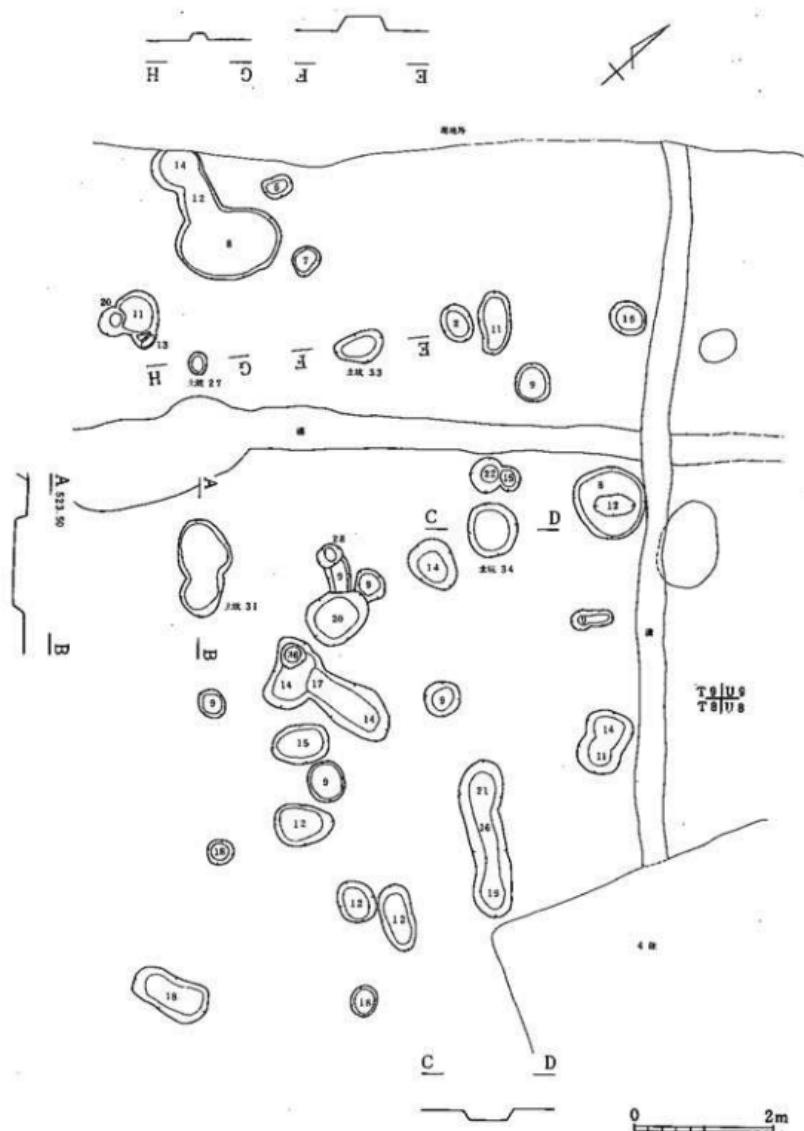
土坑20（挿図17）

土坑19の南隣で検出した。1.1×0.5mの不整梢円形で深さは28cmを測る。底はほぼ平坦で壁は比較的緩やかな立ち上がりをしている。

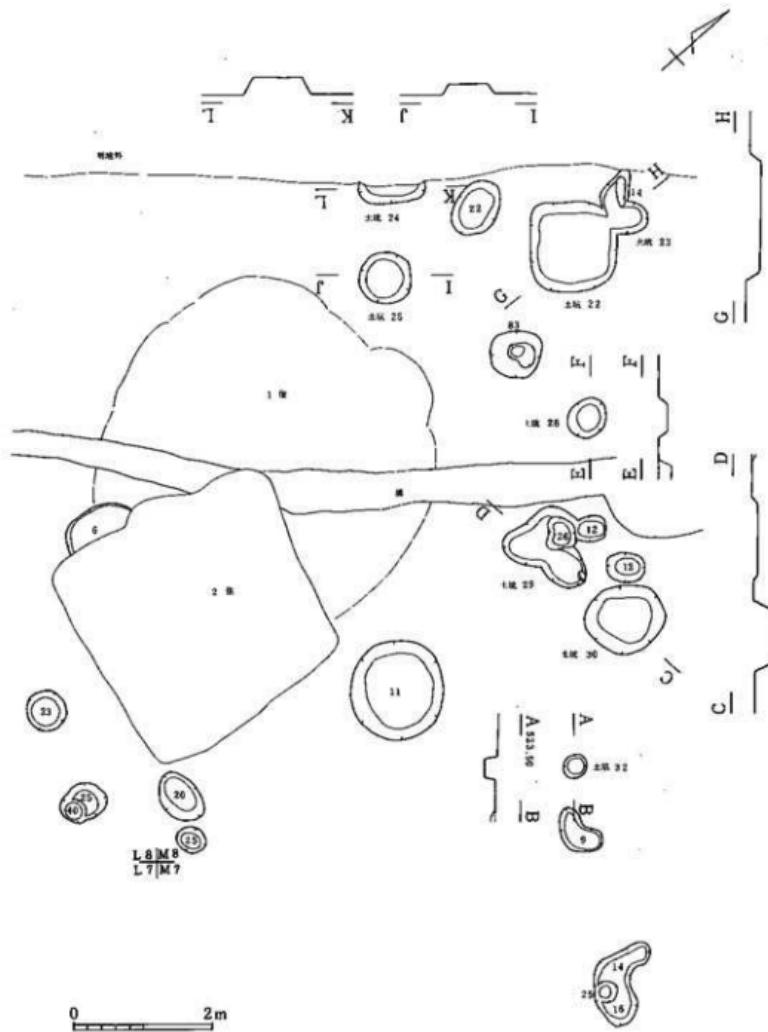
覆土からは緑泥岩の打製石斧の基部が出土したのみで時期の特定にはいたらなかった。



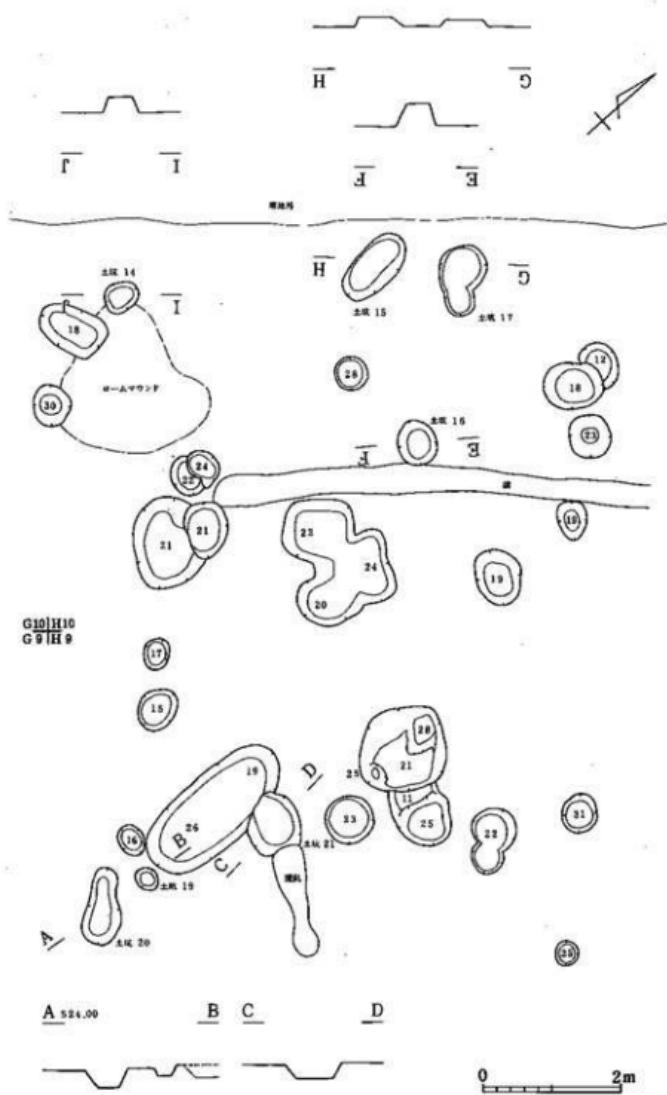
挿図14 KMJ W9付近柱穴群



挿図15 KMJ 土坑27・31・33・34



插図16 KMJ 土坑22・23・24・25・28・29・30・32



插図17 KM.J 土坑14・15・16・17・19・20・21

土坑21（挿図17）

土坑19の北側18のほぼ中央で検出したが西側で別の穴と切り合っている。規模は推定で 1.0×0.8 mの梢円形、深さは22cmである。底はほぼ平坦で、壁は残っている部分で南側より北側がやや急角度であるがおおむね緩やかな立ち上がりである。

覆土からは土器の小破片が出土したのみで時期決定にはいたらなかった。

土坑22（挿図16）

1号住居址の北側O12で検出した。北側で土坑23と切り合うが新旧関係は不明である。規模は 1.3×1.2 mの隅丸方形で、深さは23cmある。底は中央にやや窪んでいる。壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土からは硬砂岩の破片が出土したのみで時期決定にはいたらなかった。

土坑23（挿図16・第7図）

P12で検出した。南側で土坑22と切り合っているのが新旧関係は不明である。不定形をしており、規模は 0.8×0.4 mである。底までの深さは東西で異なり、深い東側で16cm浅い西側では11cmを測る。また、浅い西側の北壁直下には6cmほどの落ち込みがある。壁は比較的急角度で立ち上がっている。

覆土からは石匙とみられる硬砂岩（第7図4）が出土したが時期の特定はできなかった。

土坑24（挿図16・第7図）

1号住居址の北側・N12で範囲外にかかって検出した。調査した部分は 1.0×0.3 mの半梢円形のみであった。深さは24cmで底はほぼ平坦である。

覆土中からは硬砂岩の横刃形石器とみられる石器（第7図5）が1点出土しているのみで、時代を特定するのにはいたらなかった。

土坑25（挿図16）

土坑24と1号住居址の間、N12で検出し完掘した。平面形は直径0.8mの円形を呈している。深さは16cmと比較的浅く、底はほぼ平坦である。

覆土中からは土器の小破片が出土しているのみで、時代を特定するにはいたらなかった。

土坑26（挿図10）

方形堅穴と落ち込みの間H5にかかって検出し、完掘した。規模は 1.5×1.2 mの梢円形で深さは30cmある。しかし、底の東壁直下には 1.2×0.6 m、深さ27cmの梢円形の穴があるため、2段になっており、全体では比較的深い土坑である。壁は東側は急であるがそれ以外はやや緩やかに立

ち上がっている。

覆土からは、火を受けて剥離した硬砂岩が出土しているが、時期・性格とも不明である。

土坑28（挿図16）

1号住居址の北東、土坑27との中間P11で検出した。規模は直径0.6mの円形で、深さ13cm、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

覆土からは土器の小破片が出土したが、時期の特定はできなかった。

土坑29（挿図16）

土坑28の南東側、O10で検出した。1.2×0.9mの不定形をしているが、見方によれば、東西に2つの穴が切り合っているように見える。東側は深さ13cmの梢円形の穴で壁は比較的急角度である。西側の穴は、不整梢円形で深さ9cmと浅いものであるが、北壁直下には13cmの深さをもつ円形の落ち込みがある。壁は全体的に緩やかな立ち上がりがある。

覆土から土器の小破片が出土しているが時期の特定はできなかった。

土坑30（挿図16）

土坑29の南東側、P9で検出し、完掘した。直径1.0mで、深さ29cmを測る。底は平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

覆土から土器の小破片が出土しているが時期の特定はできなかった。

土坑32（挿図16）

土坑30の南東側、P9で検出し、完掘した。直径0.3mと小さく土坑というよりも柱穴かもしれない。深さ19cmで、壁はほぼ垂直にたちあがっている。

覆土からは横刃形石器とみられる硬砂岩が出土したが、時期の特定はできなかった。

土坑33（挿図15）

土坑27の北東、R11で検出し、完掘した。0.8×0.5mの不整梢円形で、深さは21cmを測り、底は平坦であった。壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

覆土からは土器の小破片が出土していが時期の特定はできなかった。

土坑34（挿図15）

土坑33の東側、S10で検出し、完掘した。直径0.7mの円形で、平坦な底までの深さは16cmと深い。壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土からは土器の小破片が出土しているが時期の特定はできなかった。

土坑35（挿図13）

4号住居址の東側、W 4で検出し、完掘した。0.6×0.4mの梢円形を呈している。ほぼ平坦な底までの深さは19cmとさほど深くない。壁は北側がややゆるやかなのに対しその他の比較的急角度である。

覆土からの遺物の出土がないため、時期・性格ともに不明である。

土坑36（挿図13）

土坑35の北西側、W 6で検出し、完掘した。0.6×0.5mの梢円形をしている。深さは12cmとごく浅く、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。底はほぼ平坦である。

覆土からは土器の小破片が出土しているが時期の特定はできなかった。

土坑37（挿図12）

4号住居址の東隣、U 5で検出し、完掘した。0.6×0.4mの梢円形を呈している。深さは27cmある。壁は東側が比較的緩やかばかりか、急角度に立ち上がっている。

覆土からは土器の小破片と打製石斧と見られる綠泥岩が出土したが、時期決定にはいたらなかった。

4) 溝

溝1（挿図10）

落ち込みと堅穴の中間、G 2付近から右にカーブを描きながらJ 1から用地外へ延びる溝を検出した。J 1付近では溝2を切る。調査した部分では幅0.8mとほぼ一定、深さも12cm前後とごく浅いものである。底はほぼ平坦である。

覆土である青灰色砂質土の中からは遺物の出土がないため時期の特定はできなかった。また、前述した通り、底には凹凸がなく水の流れた様子もうかがえないため、性格も不明である。

溝2（挿図10）

溝1に切られて検出した。ほぼ東西に延びるものと考えられるが、J 1で用地外に続いたため完掘できなかった。調査した部分は長さ5.0m・幅2.0～1.2mである。底は3段に分かれているため、堅穴の切り合いの連続とも見えるが、全体が把握できないこともあり一応溝とした。底部を見ると西側は幅0.4m長さ1.2mの溝状になっており、深さは24cmである。中央部は直径0.9mの半円形で深さ37cmを測る。東側は一番深く51cmある。壁は比較的緩やかに掘られているが、中央から西にかけての南壁および西端の北側には陵がある。

暗褐色土の覆土からは土師器片・須恵器片が出土しているが時期決定にはいたらなかった。また、性格も不明である。

4. その他

1) 柱穴群（挿図9～17）

調査区全域で検出した。平面形や大きさ、深さはまちまちであり、統一性が見られないため据立柱建物址として把握できなかった。また、遺物が出土しなかったため土坑として扱わなかったものもあり、柱穴と断定することもできない。それぞれが遺構であることには違いないがひとつづつの時代決定や性格付けは困難である。

2) 遺構外出土遺物（第7・8図）

調査区全体には、柱穴が確認できたが建物址にはならなかった。その他にも溝や耕作の跡なども確認できた。

前述の遺構に伴わない遺物は、調査区全体から出土しているが、量は比較的少ない。土器は小破片のみであり、その量もごくわずかである。石器も量的には少ない。

黒曜石製の石鎚（第8図10）は比較的小型である。また同石製のスクレイバー（第8図11）もある。打製石斧（第7図6～13・第8図1）は遺物の中では多い方であるが、地域的な特徴のか硬砂岩に比べ緑泥岩が多い。しかし、横刃形石器（第8図2～4）は硬砂岩製であった。

その他には石錐（第8図5～8）や黒曜石の破片（第8図9）、チャートの破片もあった。

IV ま と め

今回の調査は、工場敷地内に限られた小範囲での発掘調査であり、遺跡全体の様相等を把握することはできなかったが、いくつかの事実は明らかになり、時代毎に概観してまとめとしたい。

鎌倉時代伊賀良庄地頭代であった四条金吾が殿岡に居を構えたとされ、今日それに関連すると考えられる地名として堀之内・公文所などがある。本遺跡の公文所前もそれに関連するものであり、中世前後において重要な役割を果たしていた地と考えられ、今回の発掘調査においても、それに関連する何らかの遺構等が検出されることが予想された。

調査の結果は、本文中に記したとおりであるが、当初予想された中世に関連する資料は、わずかな陶磁器片が出土したのみであった。なお、時期、性格等の確定できなかった溝址及び竪穴は中世に属する可能性もあり、将来周辺部の調査等によって新事実が確認されれば、具体的な時期・性格が明らかになる可能性も高く、本地点の該期における具体的な位置づけも可能といえる。

縄文時代については、縄文時代中期中葉の竪穴住居址・土坑などが発見され、集落址の一画を成すと判断される。周囲の地形状況などから推測すると、かなり規模の大きな集落が形成されていた可能性が高い。

北方へ数100m離れた同一段丘面上には、昭和63年の発掘調査により、同時期の集落が確認された下原遺跡がある。それとの間には凹地もあり、微地形の変化から同一集落が連続するとは考え難いが、同時期の集落が近接地において営まれていることは、この付近一帯が生活適地としてまた、大規模な集落を存続し得た基盤があった場所といえる。また、微地形の変化はあるが、全体的な地形は平坦地が連続しており、この一帯には縄文時代中期において、本遺跡・下の原遺跡のみでなく、大規模な集落が複数存在した遺跡群であるといえ、当地方全体からみても該期の中心的な集落群としての位置付けが可能と考えられる。

次に、平安時代の竪穴住居址3軒が確認されているが、出土遺物の内容から、いずれも9世紀代に属すると判断され、集落の一画を成している。しかし、遺物等から同時期に存在した家とはいはず、むしろこの3軒が連続した同一家系の家である可能性がある。

縄文時代の集落が途絶えた後、弥生時代から奈良時代の人々の生活痕跡が皆無のこの地に唐突に出現した平安時代の住居址は、何を意味するのか即断困難であるが、いくつかの捉え方がある。

今次調査地点の近くに公文前古墳があり、弥生時代・古墳時代・奈良時代の集落が近隣のいずれかに所在したと判断される。それは、何らかの理由により集落の中心地を移動しての生計があつたのではと推測され、公文所前古墳築造に関与した人々の後裔が、今回確認された住居址の居住

者であったともいえる。

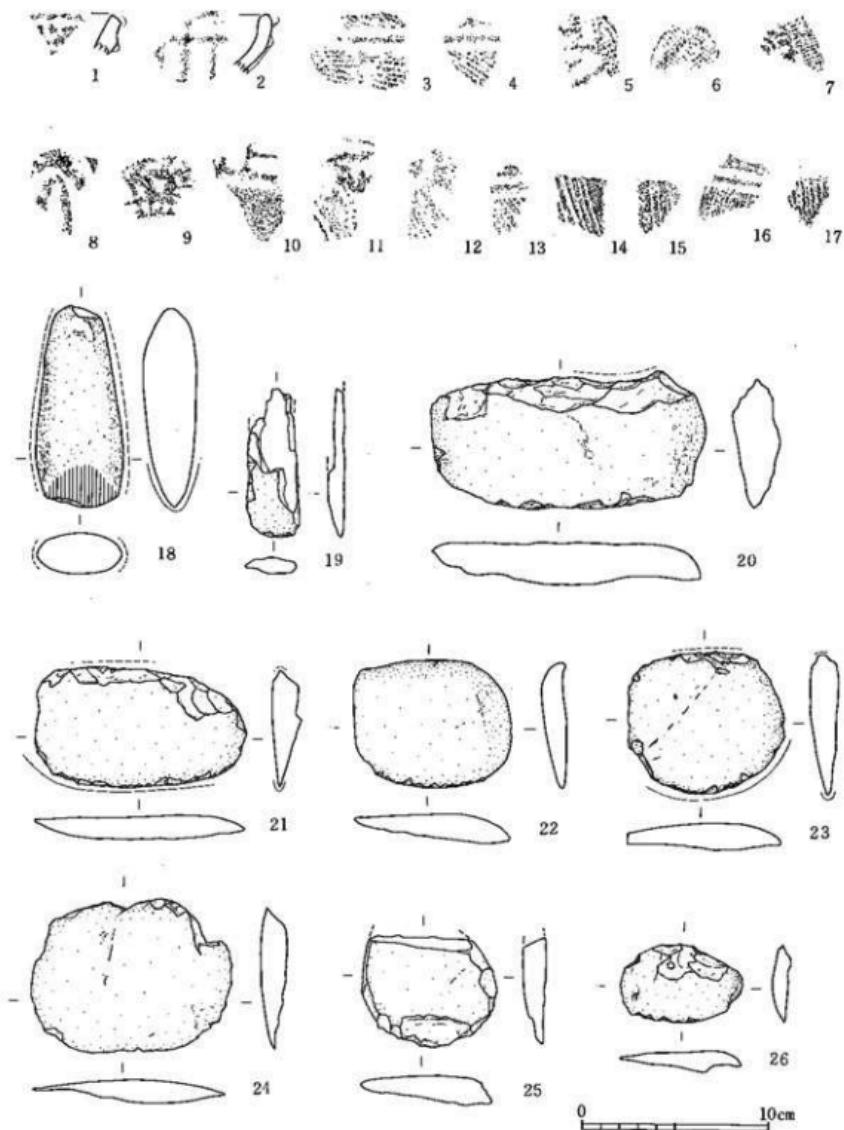
また、東山道育良駅の推定地の1つをこの付近に求める考え方があり、それを肯定し仮定した場合、それに関連した居住址群とすることもできる。また、前述の伊賀良庄に先行する姿の存在も一考を要するといえる。

以上、今回の調査について概要を記し、現段階におけるいくつかの推測を行ったが、遺跡全体の具体的な姿は、周辺部分において発掘調査等による事実の集積が不可決といえ、今後に課せられた課題は多大なものといえる。

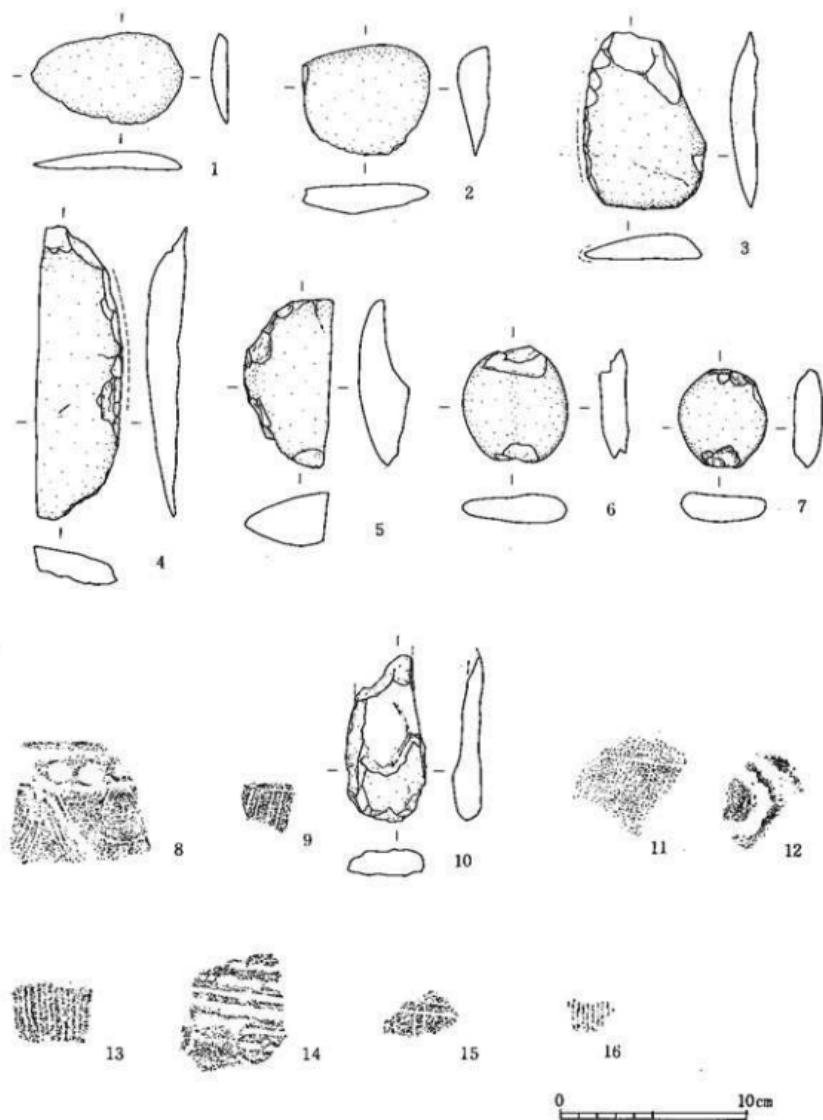
最後になりましたが、文化財の保護に深いご理解と、ご協力をいただいた地区の方々及び国際自動機械株式会社に対して記して感謝の意を表する次第です。

(小林 正春)

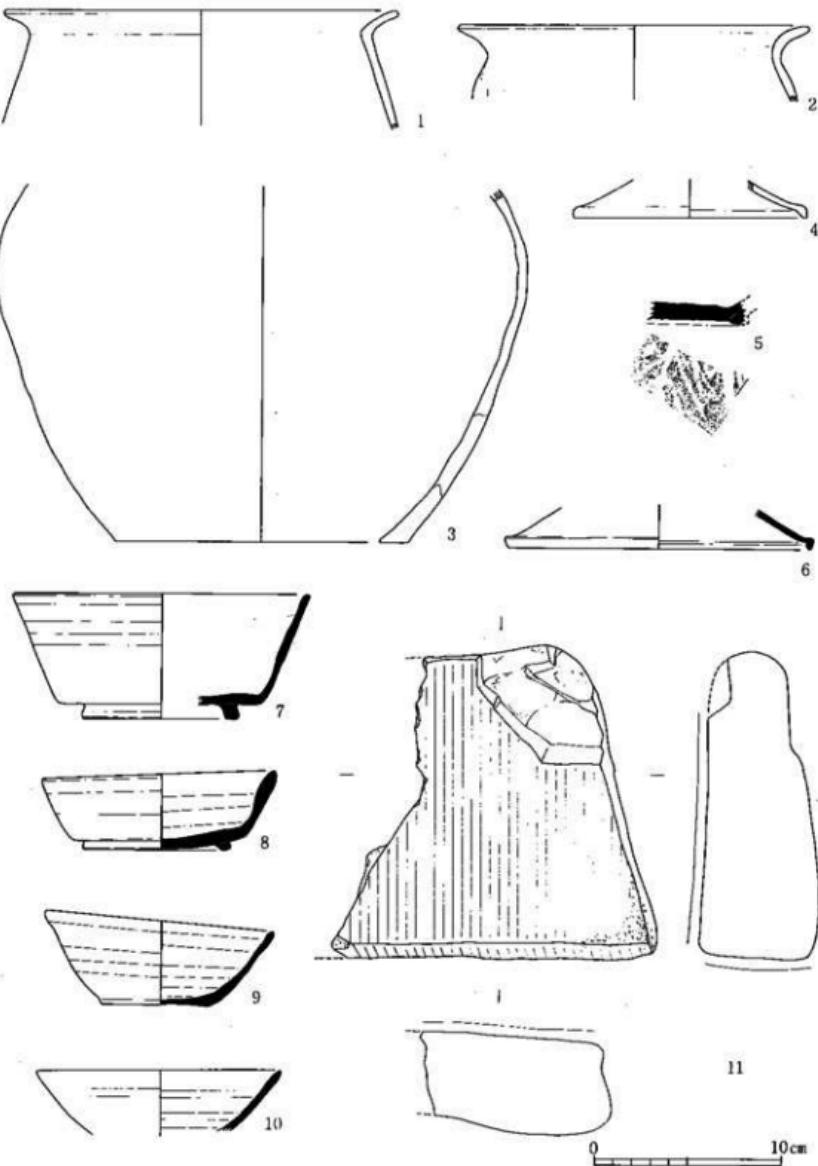
図版



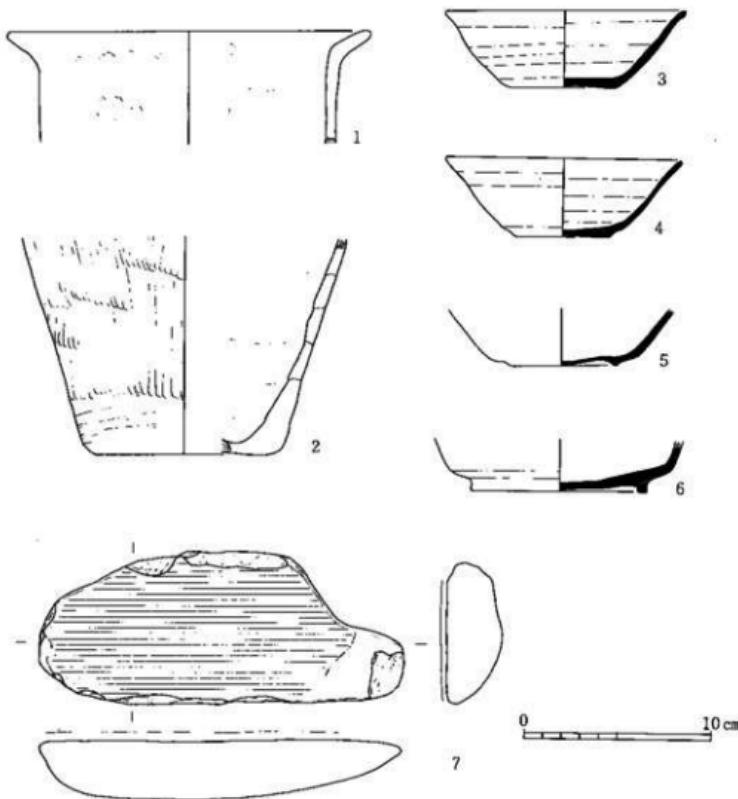
第1図 KMJ 1号住居址出土遺物



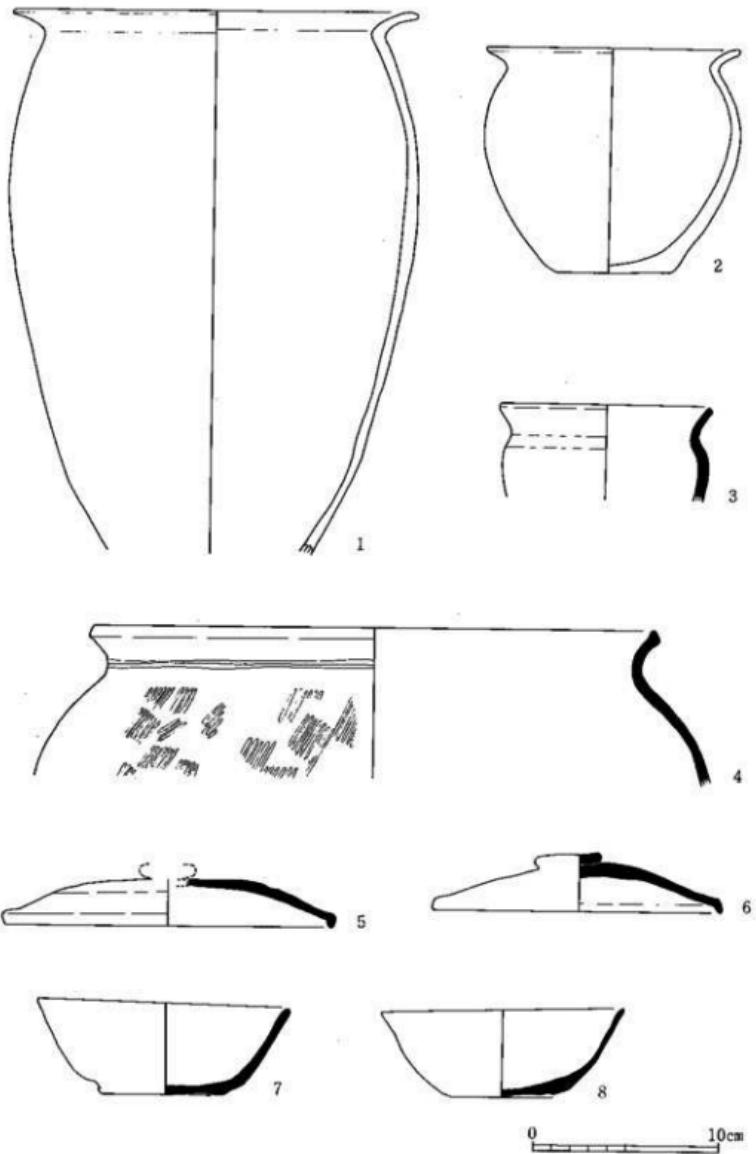
第2図 KMJ 1号住居址・土坑1・2・3・7・14・27・31出土遺物



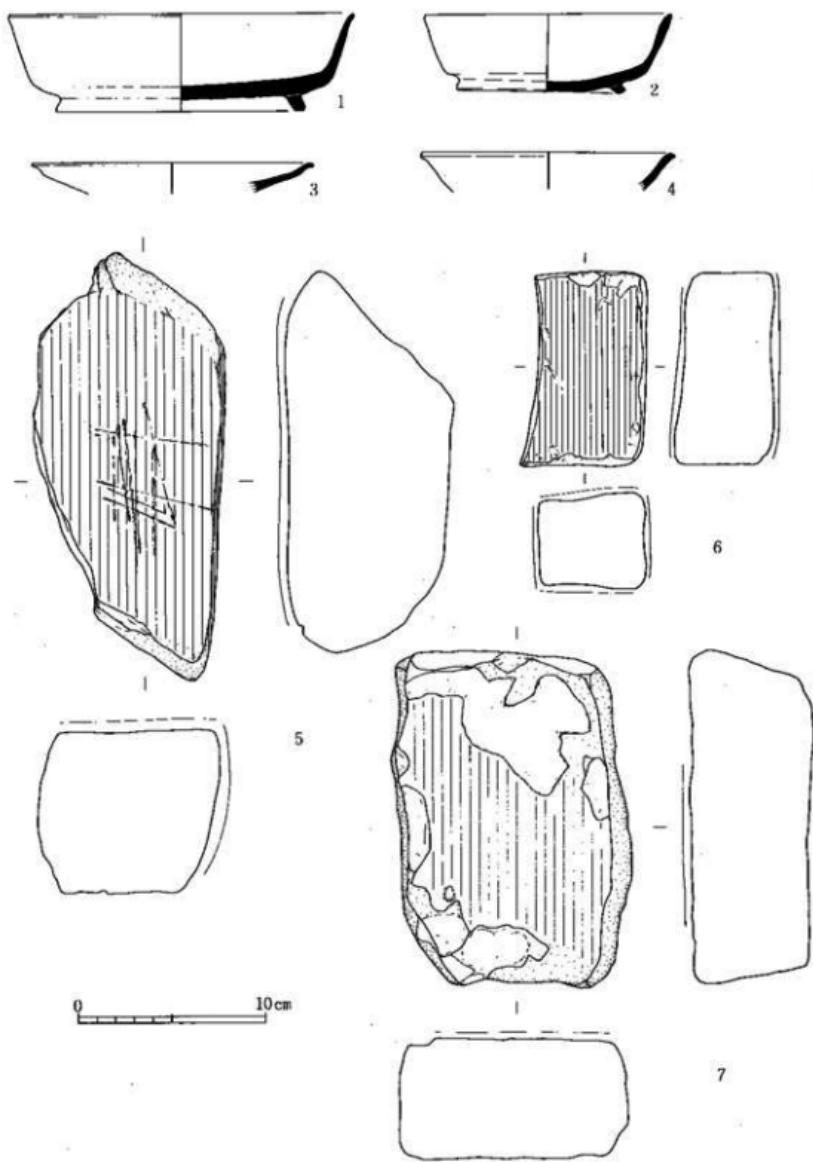
第3図 KMJ 2号居住址出土遺物



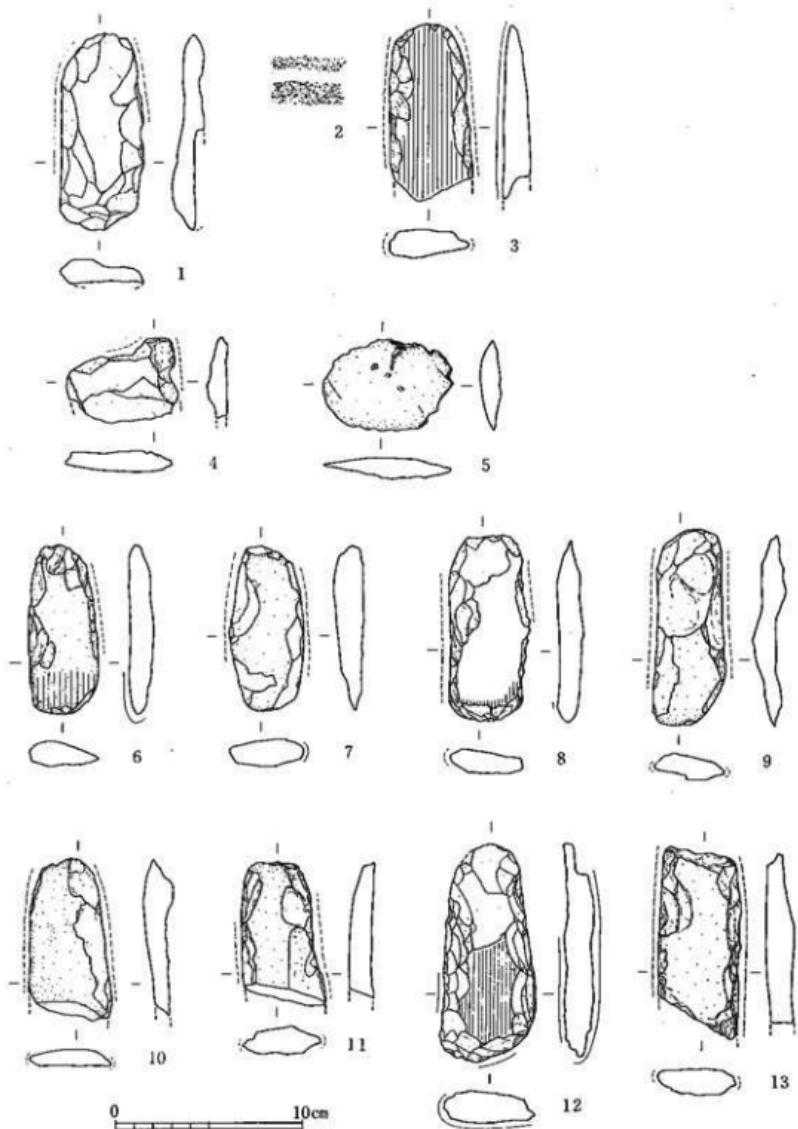
第4図 KM J 3号住居址出土遺物



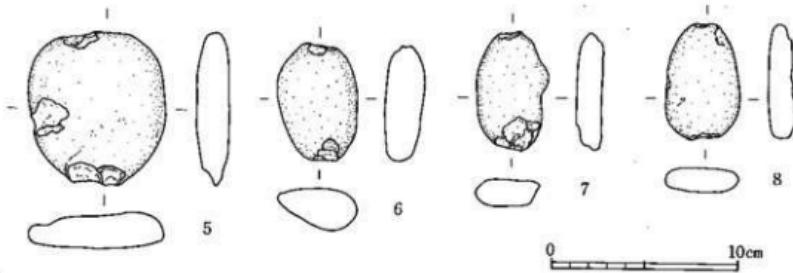
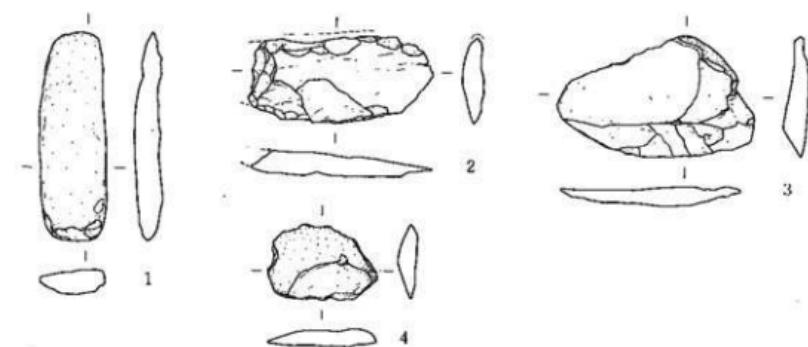
第5図 KMJ 4号住居址出土遺物



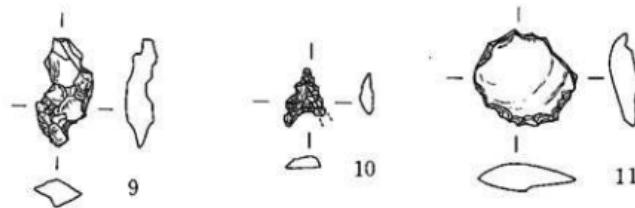
第6図 KM J 4号住居址出土遺物



第7図 KMJ 土坑9・12・23・24、造構外出土遺物



0 10cm



0 5cm

□ ○ 12

第8図 KMJ 1号・4号住居址、遺構外出土遺物

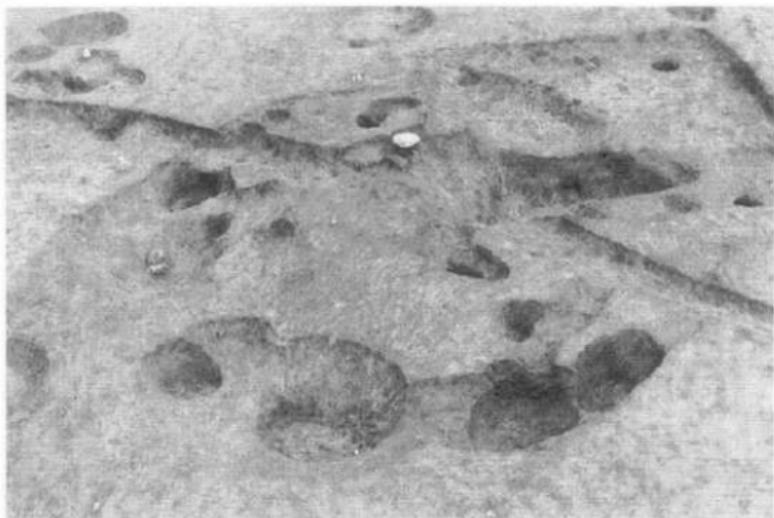
写 真 図 版

図版1



KMJ 全景

図版 2



1号住居址



同炉址



2号住居址

同カマド

同断面



遺物出土状態

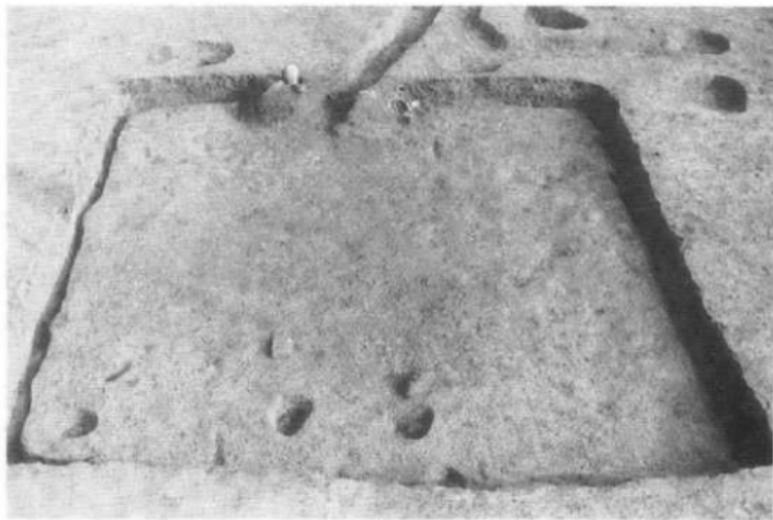
図版 4



3号住居址

3号住居址
カマド





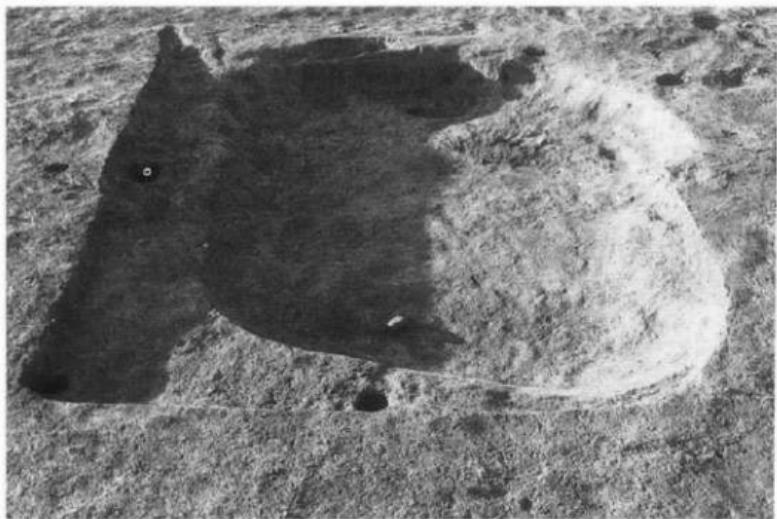
KM J 4号住居址

同カマド断面



遺物出土状態

図版 6



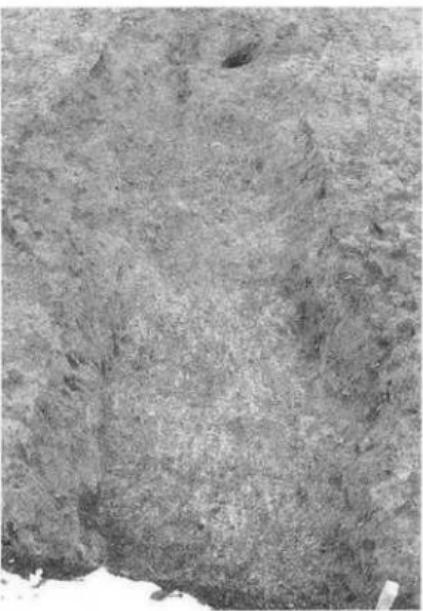
方形竪穴 1



竪穴 1

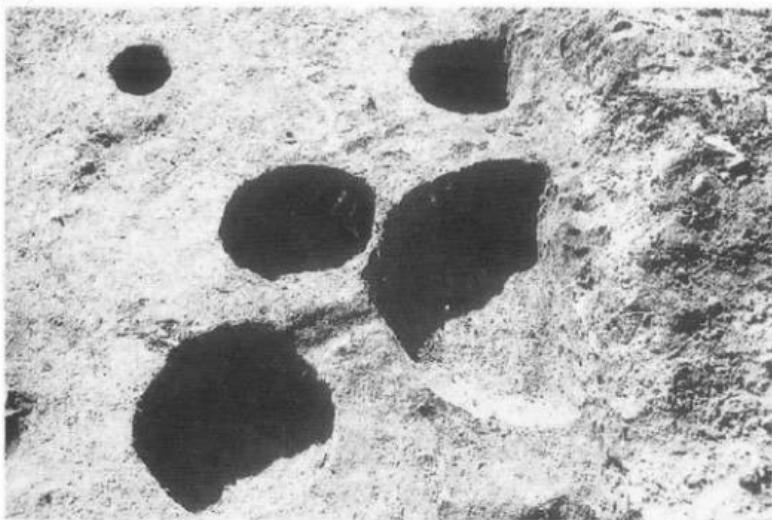


溝 1

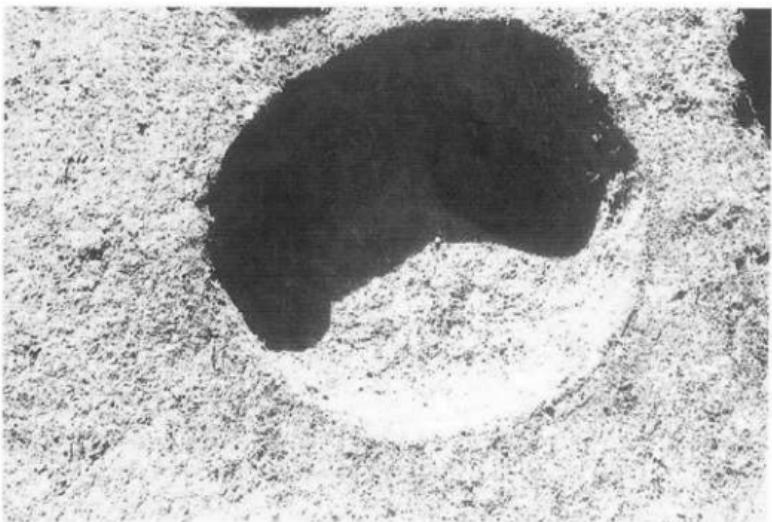


溝 2

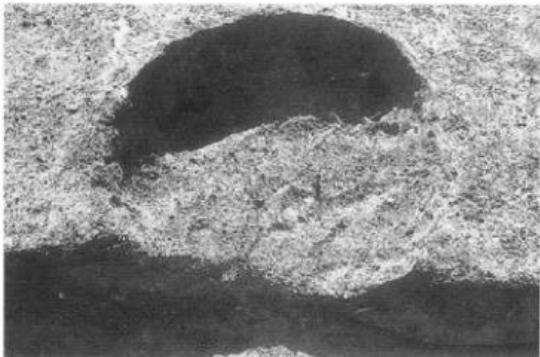
図版 8



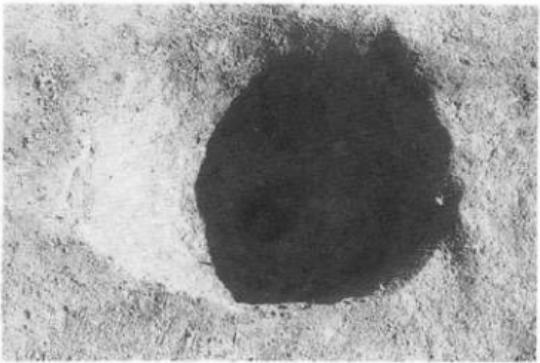
土坑 1・2・3・4



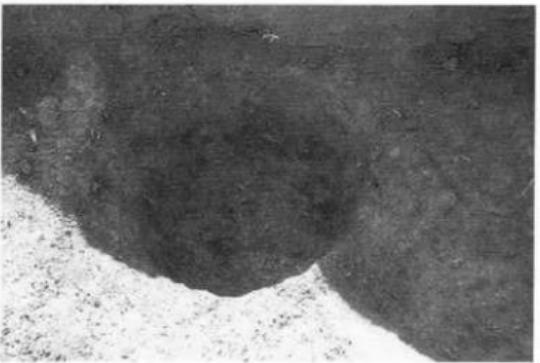
土坑 5



土坑 6

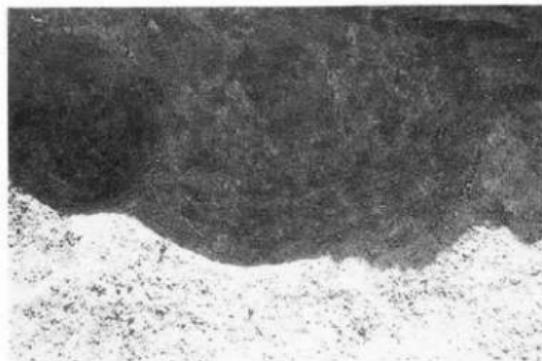


土坑 7

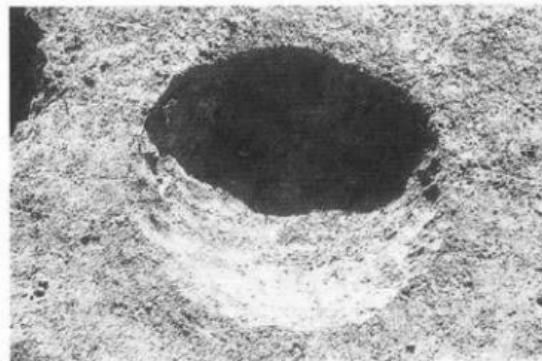


土坑 8

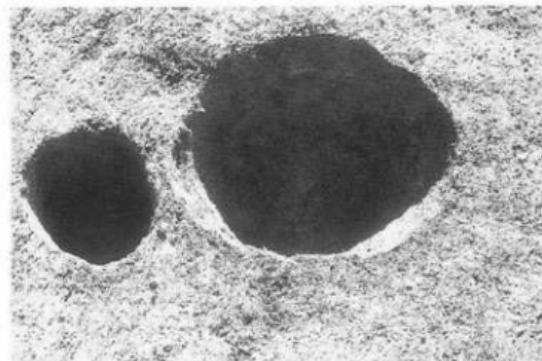
图版10



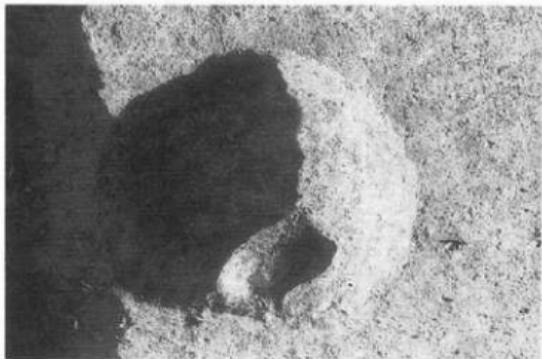
土坑 9



土坑 10



土坑 11



土坑12

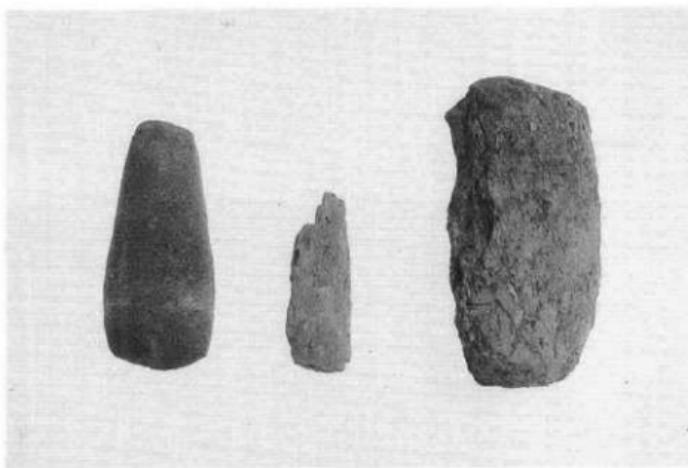
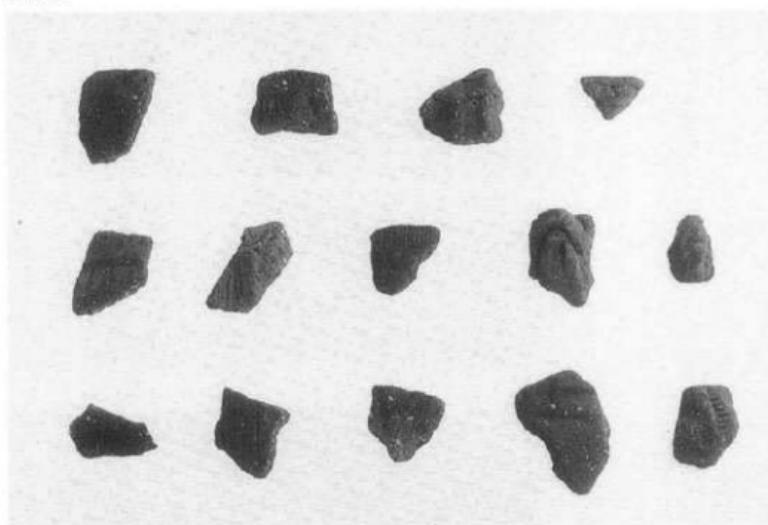


土坑13・14



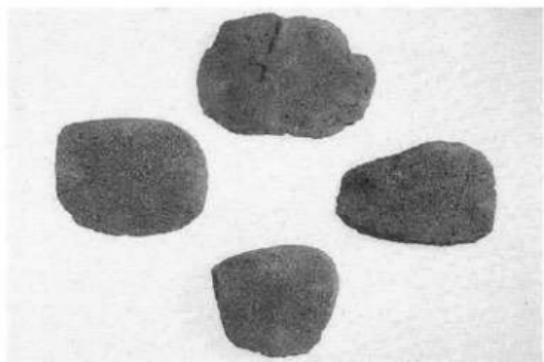
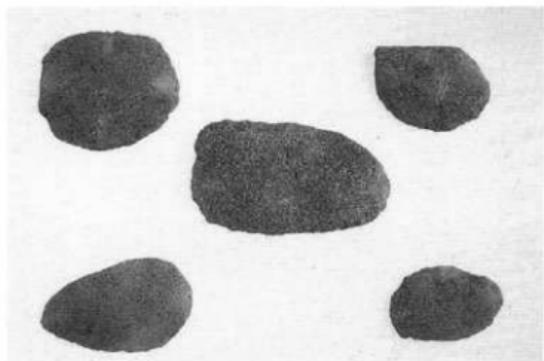
土坑15・17

図版12



1号住居址出土遺物

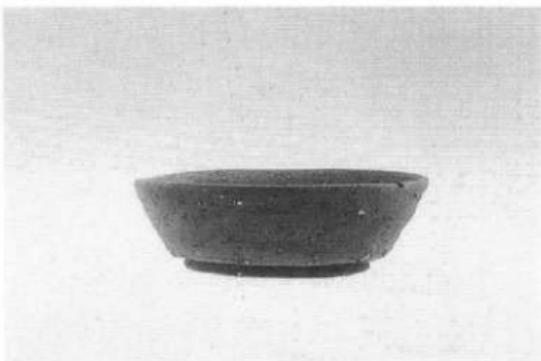
図版13



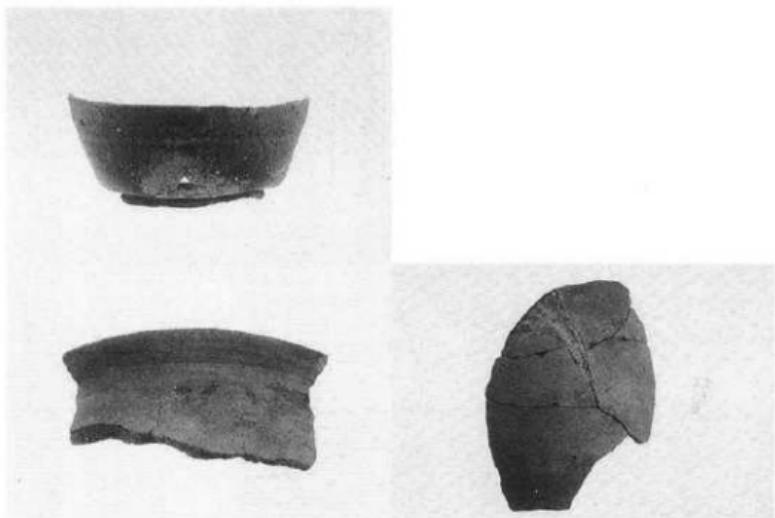
K M J

1号住居址出土遺物

図版14



2号住居址出土遺物



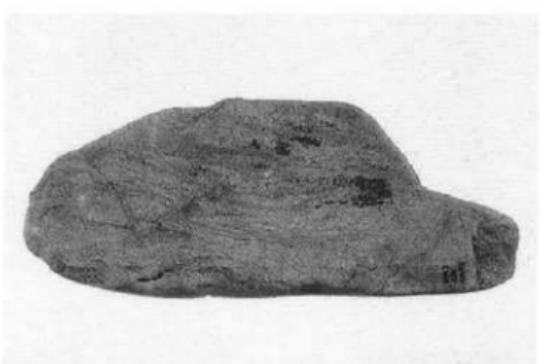
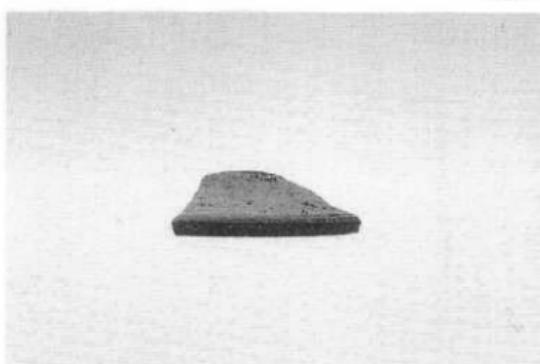
2号住居址出土遺物



3号住居址出土遺物

图版17

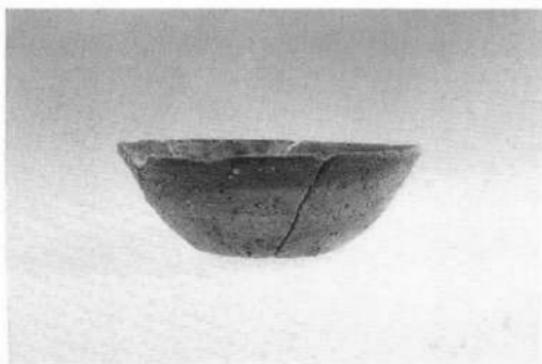
3号住居址出土遗物



图版18



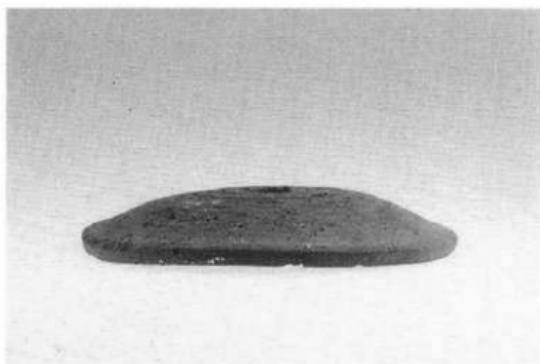
4号住居址出土遗物



4號住居址出土遺物

図版20

4号住居址出土遺物

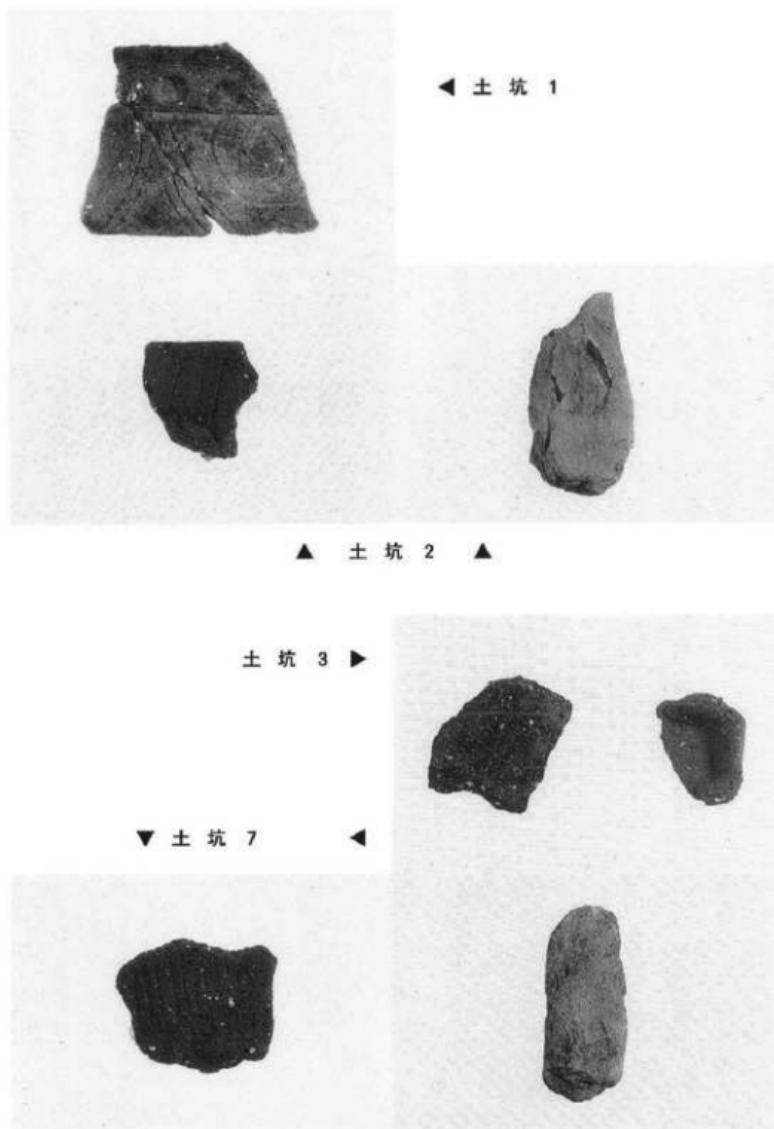




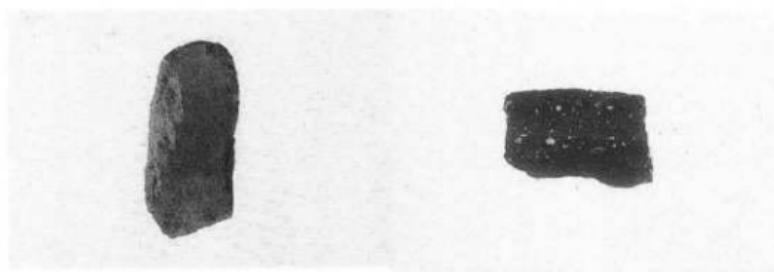
4号住居址出土遗物



图版22



KMJ 土坑出土遗物



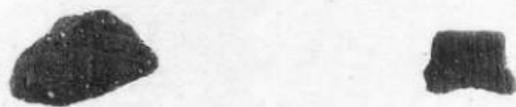
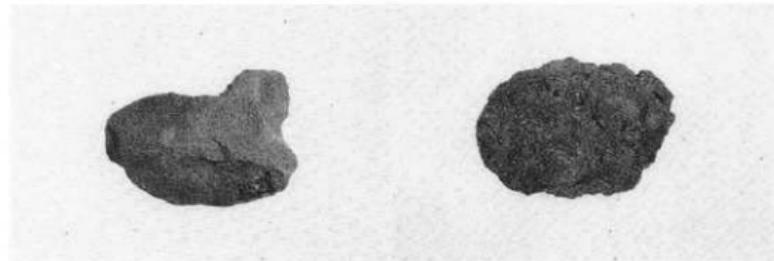
土坑 12 ▲ ▼



土坑 14 ▶

土坑 23 ▼

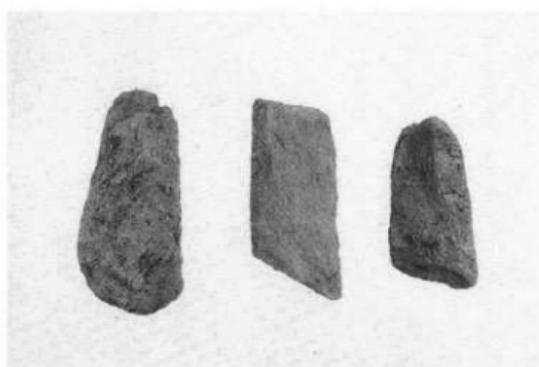
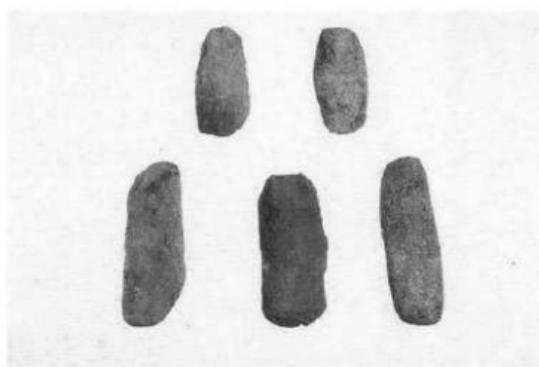
土坑 24 ▼



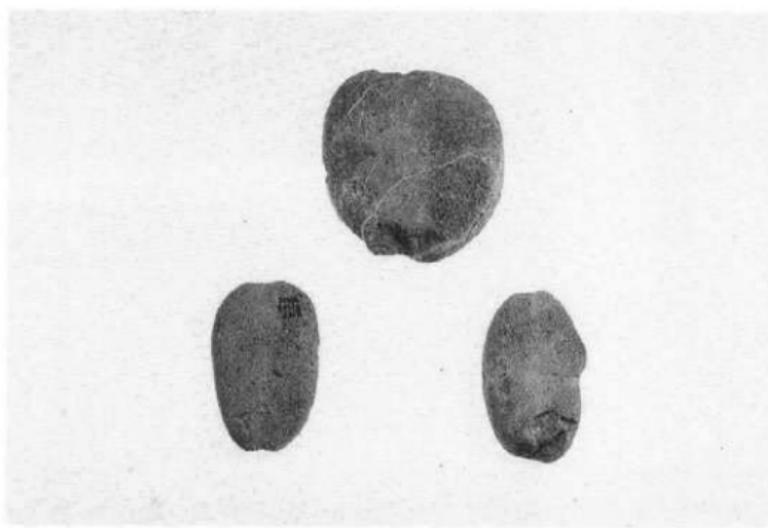
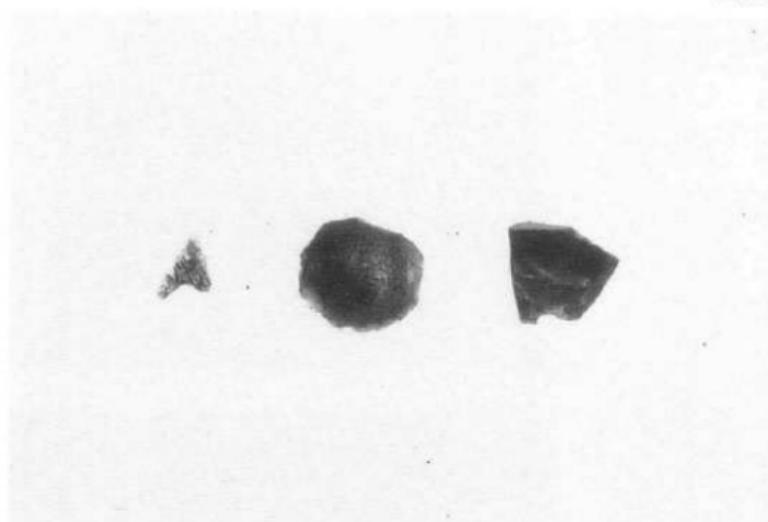
土坑 27 ▲

土坑 31 ▲

図版24



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

図版26

調査風景



公文所前遺跡

工 場 建 設 に 伴 う
埋 藏 文 化 財 包 藏 地 等 緊 急 発 挖 調 査 報 告 書

1991年 3月

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534

飯田市教育委員会

印 刷 龍 共 印 刷 株 式 会 社

